佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）
第 3 期修了生追跡調査結果の概要

佐賀大学大学院学校教育学研究科　専任教員一同

代表執筆者：荻野　亮吾（教育経営探究コース）　・　平田　淳（教育経営探究コース）

授業実践探究コース：岡　陽子　・　米田　重和　・　佐長　健司　・　堤　公一　・
森　泰樹
子ども支援探究コース：井邑　智哉　・　下田　芳幸　・　中尾　恵子　・
中島　俊思　・　日野　久美子
教育経営探究コース：中西　美香　・　松尾　敏実

An Overview of the Results of the Follow-up Survey for the Third Graduates of the Graduate School of Teacher Education of Saga University

The Faculty Members of the Graduate School of Teacher Education of Saga University

Representative Authors: Ryogo OGINO (Educational Administration Course),
Jun HIRATA (Educational Administration Course)

Instructional Practice Course: Yoko OKA, Shigekazu KOMEDA, Takeshi SANAGA,
Koichi TSUTSUMI, Yasuki MORI
Children Support Course: Tomoya IMURA, Yoshiyuki SHIMODA, Keiko NAKAO,
Shunji NAKAJIMA, Kumiko HINO
Educational Administration Course: Mika NAKANISHI, Toshimi MATSUO

1.　本調査の背景・目的・方法

(1)　調査の背景と目的

佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院，以下「本大学院」）は 2016 年 4 月の発足以来，今年度で 5 年目を迎えた。また，2022 年（来年）3 月には第 5 期の修了生を送り出すことになる。つまり，ここ 1－2 年が本大学院にとって「5 年」という一つの区切りということになる。この区切りの時期を契機として，これまでの本大学院の研究・教育活動を省察し，今後の改善のための素材を得るための効果検証プロジェクトを，次年度以降，本大学院所属教員の共同研究として実施したいと思い至った。今回の調査は，次年度以降の本格的調査に向けて予備的に行われるものであり，その目的は本大学院改善に向けた体系的データを収集するためのリサーチ・デザイン構築の予備知識を得ることである，と設定する。

これまでも修了生関連の追跡調査は，第 1・2 期修了生それぞれが修了した次の年度に実施してきた

が，それは次のようなものであった。

- 修了生に関しては，E-Mail 添付ファイルで「勤務校での様子や現在の心境など，自由にお書きください。また，教職大学院での学びや勉強したことを通して，現在役に立っていること等も書いて下さい。」というように依頼し，回答してもらった。
- 修了生の所属機関の上司に関しては，原則として，修了生の大学院在籍時主担当指導教員が所属機関を訪問し，対面で「当該修了生の現任校における勤務状況について。教職大学院へ派遣した成果は，どのような点で認められますか？」，「今後，当該修了生に期待することは何ですか？」，「今後，特に教職大学院に望むことはありますか？」という 3 つの質問に回答してもらい，その後意見交換を行った。あるいは，事前に E-Mail 添付ファイルで質問用紙を送信し，訪問当日に回答記入済みの質問用紙を基に意見交換をした場合や，日程調整がつかない場合は E-Mail 添付ファイルのみのやりとりで回答を受け取る場合もあった。

こうした概括的な質問項目は，その専門領域が授業実践研究から教育心理，特別支援教育，社会教育，教育経営まで幅広い，それだけに研究方法も異なる多様なスタッフが同一のスタンスでデータを収集するには確かに有効であるし，言ってみれば「思うところを何でもお話しください」という形での聞き取り調査は，調査協力者の多様な関心や認識を引き出すことも可能であるという意味で，一定の意味はある。他方で，調査結果は修了者及び修了者の所属機関上司いずれの回答もそれぞれ 1 つのファイルにまとめられ教員間で共有はされたが，それを基に意見交換をしたり，データを体系的に分析し，本大学院のカリキュラムや授業方法の改善を志向して具体的な検討を行うことは，これまではなかった。質問内容も概括的なもの数問に留まっており，回答もオープンエンドではあるものの，質問自体は質的調査でよく使われるような，対話を通して回答内容を深めていくために半構造化（semi-structured）された，いわゆる「インタビュー・ガイド」と言えるようなものではなかった。また，調査対象が 20 名と少数であったこともあったが，質問紙調査等の量的調査方法を併用するものでもなく，全体的な傾向性を数値で示すことも想定していなかった。つまり，体系的にデザインされた調査ではなかったという点は否定できない。

そこで次年度以降行う予定である効果検証プロジェクトにおいては，まずはこれまでの本大学院の実践を全体的かつ具体的に把握するために，より総合的・体系的にリサーチの全体像をデザインし，具体的な改善策の検討のために「使える」データの収集をする必要がある。そうした志向性を持ちつつ，上述の通り今回の調査は次年度以降の本格的な調査に先立ちその前段階として，これまでは実施してこなかった質問紙調査を通して全体的な傾向をつかみ，次年度以降のリサーチ・デザインの構築の一助としたい。また，次年度以降こうした追跡調査をそれまでの全修了生を対象とした，多少大掛かりなものに発展させていくためにも，またインタビュー等質的調査方法も織り交ぜ，データをより深掘りすることを可能とするためにも，今回はそのたたき台を作るための予備調査的位置づけのものとして実施した。

なお，以下では，授業実践探究コースを「授業実践」，子ども支援探究コースを「子ども支援」，教育経営探究コースを「教育経営」と略すことにする。

(2)　調査の対象

本調査の対象は，2020 年 3 月に本大学院を修了した 20 名の第 3 期修了生と，それぞれの現任校の

管理職 20 名である。大学院生は，現職教員院生 10 名（以下「現職」）と，いわゆる「ストレート・マスター」（以下「ストマス」）の院生 10 名で構成される（以下では，両者をあわせて「修了生」とする）。修了生が，学校でなく教育委員会等に勤務する場合は，管理職でなく現在の上司を調査対象とした（以下，現任校の管理職及び現在の上司の総称として「管理職」を用いる）。

本調査の対象となった第 3 期修了生の現在の所属機関の種類及び職制と人数は次の通りである。

○　現職
・　小学校教諭　2 名
・　中学校教諭　2 名
・　高等学校教諭　3 名
・　教育委員会・教育事務所指導主事　3 名（いずれも異動前は小学校教諭）
○　ストマス
・　小学校（義務教育学校前期課程含む）教諭　4 名
・　中学校教諭　3 名
・　中学校講師　1 名
・　高等学校教諭　1 名
・　特別支援学校教諭　1 名

また，管理職調査の対象者である第 3 期修了生の現在の所属先上司の役職は，学校の場合はすべて校長，教育委員会・教育事務所の場合は所属長（課長等）である。

(3)　データ収集と分析の方法

本調査におけるデータ収集は，質問紙調査における選択肢回答（5 件法）と自由記述式回答を併用して行った。質問紙調査の設計に関しては，2020 年 10 月に修了生と管理職それぞれの調査票について，各コースのコース長が中心になり，共通項目を作成した。この上で，各コース独自の項目の検討を行い，管理職用の調査票を 1 つと，「授業実践」，「子ども支援」，「教育経営」それぞれのコースで修了生用の調査票を 1 つずつ作成した。修了生用の調査票では，現職・ストマス共通の質問事項がほとんどではあるが，現職向けの質問項目，ストマス向けの質問項目もいくつか設けた。

調査方法は，E-Mail により調査の依頼を行い，添付ファイルにある質問紙調査票に記入した上で返信を求めるものである。調査の依頼については，修了生とその管理職それぞれ 20 名の連絡先（E-Mail）を事前に把握した上で，2020 年 10 月 28 日（水）に E-Mail で一斉に依頼書と調査票を送付した（**資料 1～資料 6**）。提出の締め切りは 11 月 20 日（金）とし，集計担当教員（荻野）への提出を依頼した。なお，締め切りの 1 週間前に，未提出者には再度提出の依頼を行った。最終的に，調査開始から 1 ヶ月後の 11 月 27 日（金）に対象者全ての調査票を回収することができた。回収率は，修了生・管理職ともに 100%（20 名中 20 名）であり，全ての調査票が有効であった。

分析については，回答者の匿名性を保つため，集計担当教員が単純集計やクロス集計，自由記述の集計を一括して行った。この分析結果を各コースの教員に共有した。この集計結果を基にコース長（授業実践：岡，子ども支援：下田，教育経営：平田）がコースごとに気づきを取りまとめ，その知見を専攻長の平田と，集計担当の荻野が中心になって，本稿へと集約した。

なお，上述の通り今回の追跡調査は，今後の本調査に向けての予備調査的な位置づけであり，今回

は質問紙調査の単純集計結果と各コースの気づきを記述するにとどめる。2021 年度以降に実施する予定の本調査では，データの妥当性や信頼性を高めるためのトライアンギュレーション（triangulation）の観点から，インタビュー調査や観察調査等も併用したミックスメソッド（mix-methods）を通して収集したデータを基に，各コースでより深い考察を行えるようにする。以下では，今回の調査結果に基づく現時点での気づきと，今後，深めていくべき論点を中心に記述する。

2.　管理職調査の結果

ここでは，修了生に関する管理職調査の結果を記述する。

(1)　大学院で学んだ成果の評価

①　全体的な傾向

まず，教職大学院で学んだ成果がどの点に認められるかについて，**図 2-1** にその結果を示した。各項目について,「とてもそう思う」,「まあそう思う」,「どちらとも言えない」,「あまりそう思わない」,「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねた結果である。

肯定の割合が 8 割を超える項目は,「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」となっていた。これに続いて，肯定の割合が高い項目として,「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」,「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」（ともに 75%),「4 物事を円滑に進めるため, 見通しを持って計画的に進めるようになった」,「21 教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった」,「28 全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている」（以上，70%）といった項目が挙げられる。一方で,「26 地域との関係づくりに積極的になった」の肯定の割合は最も低かった。

この回答の結果については，教員の年齢や経験，職制による差があるものと考えられる。また，現任校の学校種（小・中・高・特別支援）による違いも考えられる。今回の調査では，対象者が少ないため，これ以上細かく分けて分析することは難しいものの，今後調査を行う際には，この点を考慮する必要がある。

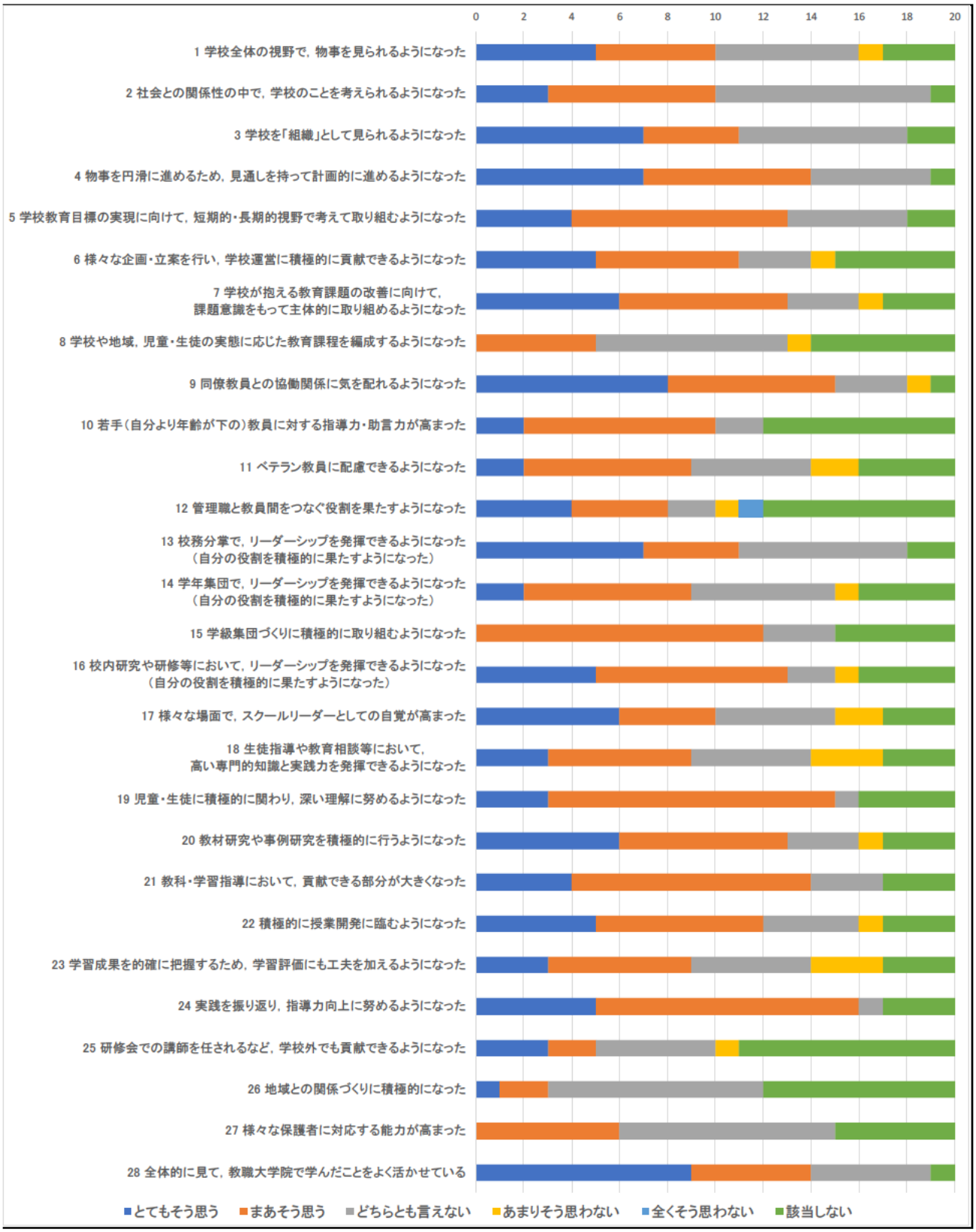

図 2-1 管理職による教職大学院で学んだ成果の評価（N=20）

同じ項目について，肯定の割合（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）を示したものが，**表 2-1** である。この表には，コースごとの割合と修了生の属性ごとの割合も示した。コースについては，「授業実践」が 11 名，「子ども支援」が 4 名，「教育経営」が 5 名で，属性については，上述の通りストマスと現職が 10 名ずつである。これらは，以降の分析でも同様である。表中の黄色の網掛けは

肯定が 8 割を超えるもの，橙色の網掛けは 6 割以上 8 割未満のものを示し，灰色の網掛けは 2 割以下のものを示している。これは，以下の表でも同様である。

表 2-1 管理職による教職大学院で学んだ成果の評価（全体，コース別，属性別）

番号	項目	肯定の割合（全体）	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	50.0%	36.4%	25.0%	100.0%	40.0%	60.0%
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	50.0%	18.2%	75.0%	100.0%	20.0%	80.0%
3	学校を「組織」として見られるようになった	55.0%	36.4%	50.0%	100.0%	40.0%	70.0%
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	70.0%	63.6%	50.0%	100.0%	50.0%	90.0%
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	65.0%	54.5%	50.0%	100.0%	40.0%	90.0%
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	55.0%	36.4%	50.0%	100.0%	30.0%	80.0%
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	65.0%	54.5%	50.0%	100.0%	40.0%	90.0%
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	25.0%	0.0%	25.0%	80.0%	0.0%	50.0%
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	75.0%	63.6%	75.0%	100.0%	70.0%	80.0%
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高まった	50.0%	18.2%	75.0%	100.0%	10.0%	90.0%
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	45.0%	36.4%	50.0%	60.0%	40.0%	50.0%
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	40.0%	9.1%	50.0%	100.0%	0.0%	80.0%
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	55.0%	36.4%	50.0%	100.0%	30.0%	80.0%
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	45.0%	36.4%	50.0%	60.0%	40.0%	50.0%
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	60.0%	63.6%	50.0%	60.0%	70.0%	50.0%
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	65.0%	63.6%	50.0%	80.0%	50.0%	80.0%
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	50.0%	18.2%	75.0%	100.0%	10.0%	90.0%
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	45.0%	27.3%	50.0%	80.0%	30.0%	60.0%
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	75.0%	81.8%	75.0%	60.0%	80.0%	70.0%
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	65.0%	63.6%	50.0%	80.0%	50.0%	80.0%
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	70.0%	63.6%	75.0%	80.0%	50.0%	90.0%
22	積極的に授業開発に臨むようになった	60.0%	63.6%	25.0%	80.0%	50.0%	70.0%
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	45.0%	36.4%	25.0%	80.0%	20.0%	70.0%
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	80.0%	81.8%	75.0%	80.0%	80.0%	80.0%
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	25.0%	9.1%	50.0%	40.0%	0.0%	50.0%
26	地域との関係づくりに積極的になった	15.0%	9.1%	25.0%	20.0%	10.0%	20.0%
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	30.0%	18.2%	75.0%	20.0%	30.0%	30.0%
28	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	70.0%	54.5%	75.0%	100.0%	40.0%	100.0%

この表を見ると，「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「21 教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」の 4 項目は，どのコースの修了生に

関しても高い評価となっている。

コース別にみると，「授業実践」の修了生に関しては，上述の項目に加えて，「4 物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった」，「15 学級集団づくりに積極的に取り組むようになった」，「16 校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」の項目が，比較的高い評価を示していた。一方，「2 社会との関係性の中で学校のことを考えられるようになった」，「8 学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった」，「10 若手教員に対する指導力・助言力が高まった」，「12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった」，「17 様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった」，「25 研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった」，「26 地域との関係づくりに積極的になった」，「27 様々な保護者に対応する能力が高まった」という項目に関する評価は低かった。

「子ども支援」の修了生については，上述の項目に加えて，「2 社会との関係性の中で学校のことを考えられるようになった」，「10 若手教員に対する指導力・助言力が高まった」，「17 様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった」，「27 様々な保護者に対応する能力が高まった」，「28 全体的に見て，教職大学院で学んだ成果をよく活かせている」といった項目が高い評価を示していた。「教育経営」の修了生については，ほぼ全ての項目で高い評価が示されていたが，「26 地域との関係づくりに積極的になった」と，「27 様々な保護者に対応する能力が高まった」については低い評価だった。

次に，ストマスと現職の評価を比較すると，現職に対しては多くの項目で高い評価が示されていた。ストマスについては，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」（ともに 80.0%），「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」，「15 学級集団づくりに積極的に取り組むようになった」（ともに 70.0%）の評価が高くなっていた。

評価が低い項目をみると，現職への評価では，「26 地域との関係づくりに積極的になった」が 2 割と低い評価になっていた。ストマスに関しては，「2 社会との関係性の中で学校のことを考えられるようになった」，「8 学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった」，「10 若手教員に対する指導力・助言力が高まった」，「12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった」，「17 様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった」，「23 学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった」，「25 研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった」，「26 地域との関係づくりに積極的になった」が 2 割以下の割合となっていた。

②　留意事項

A)　個別の授業や指導内容との関連性

以上の評価については，教職大学院の授業や指導内容との関連についての考察が不可欠である。これは，後述の表 3-3 についても同様である。試みに「子ども支援」の修了生について，評価が高い（75% を超える）項目を 4 つに分類した上で，その要因を分析してみることにした。①児童生徒と関わる力については，共通必修科目に加え，多くのコース専門科目で個別のニーズの把握やそれを踏まえた手立て等について最も重点的に取り扱っている部分であり，この点が肯定的に評価されたのではないかと考えられる。②同僚との関係性についても，共通必修科目に加え，多くのコース専門科目でも子どもの見立て・手立てに関する教職員との連携について取り扱っている部分であり，この点が肯定的に評価されたのではないかと考えられる。③保護者と関わる力については，共通必修科目に加え，多く

のコース専門科目でも子どもの見立て・手立てに関する保護者との情報共有や保護者支援について取り扱っている部分であり，この点が肯定的に評価されたのではないかと言える。④教科・学習指導力は，共通必修科目に加え，コース専門科目の中で子どものニーズを踏まえた授業づくりや授業におけるユニバーサル・デザイン等を取り扱っているため，この点が肯定的に評価されたと言えよう。

一方，評価が高くなかった項目については，「子ども支援」のコース専門科目で直接的に取り扱っていないものが多い。修士課程 1 年の共通必修科目では学んでいるが，2 年になってからの実習科目で意識する機会は少ないように思われる。これは，コースごとの特色の違いとも言えるが，修士課程 2 年での実践研究においても，折にふれてこれらの点につながるような指導が求められるかもしれない。

B)　その他の留意事項

まず，上で示した評価は，学校管理職の目線での評価であるので，修了生自身の評価とは異なることに留意が必要である。管理職の評価が低いようにみえる項目も，職制等によって実際に取り組む機会が少ないことが理由となっている場合があるだろう。例えば，「8 学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった」に関する評価が低いようにみえるのは，修了生（特にストマス）の現在の職制では編成に関わる機会が少ないことに起因していると考えられる。これとは別に，「25 研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった」に関する割合が低いようにみえるのも，修了生を講師として活用するための情報が関係各所に届いていない可能性がある。佐賀県教育センターと連携する等して，修了生が大学院や実習の中で得た経験や知識の活用方策について工夫をすることも必要ではないかと考えられる。

これ以外に，「26 地域との関係づくりに積極的になった」や，「27 様々な保護者に対応する能力が高まった」の地域や保護者との関係づくりの評価が低いことについては，学校種による差があると考えられる。例えば，生活科や総合的な学習の時間，各種の体験活動等で地域と連携する機会が多い小学校では高い割合を示すとしても，教育内容の専門性が高い高校では連携の割合は低くなり，その結果評価も低くなるといったことが考えられる。

また全体的に，現職に比べるとストマスの評価が低くなっているようにみえるが，期待される役割の大きさや，年齢や経験年数等を考慮すれば，ある意味で当然の結果であると言える。この中でも，先に挙げたように，「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」，「15 学級集団づくりに積極的に取り組むようになった」，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」については，肯定的な評価が 7 割を超えている。修了生が期待される役割に応じて，各学校で着実な取り組みを進めていることがうかがえる結果となっている。

(2)　修了生に期待する役割について

次に，今後修了生に期待する役割について，**図 2-2** に調査結果をまとめた。各項目について，「とてもそう思う」，「まあそう思う」，「どちらとも言えない」，「あまりそう思わない」，「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねた結果である。

まず，肯定の割合が高い項目は，順に「5 授業改善においてリーダーシップを発揮すること」，「6 学習評価においてリーダーシップを発揮すること」（ともに 90.0%），「1 学校改善においてリーダーシップを発揮すること」，「3 教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること」（ともに 85.0%），「2 学年団，校務分掌等学校の組織化においてリーダーシップを発揮すること」（80.0%）とな

っている。

これ以外にも，ほぼ全ての項目で高い期待が示されているが，「8 主幹教諭・指導教諭になること」，「9 校長・副校長・教頭になること」，「10 教育行政機関に携わること」は，他の項目に比べると期待の割合が低くなっている。これは，修了生の半数がストマスであることが影響していると推測される（後述）。

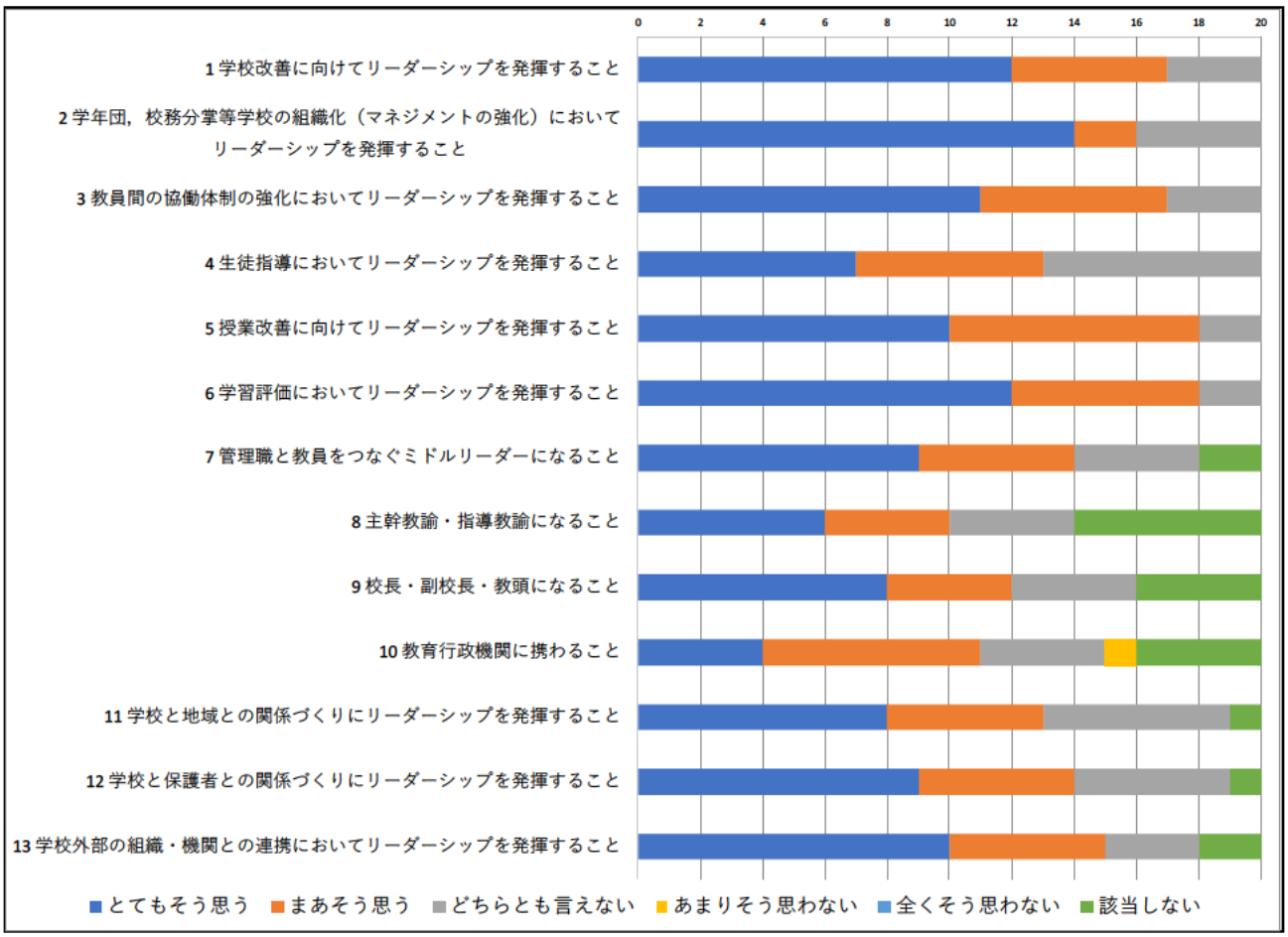

図 2-2 管理職が修了生に期待する役割（N=20）

（注）項目の 3，4，5，6，11，12，13 については，調査票では「リーダーシップを発揮すること（自分の役割を積極的に果たすようになった）」という表現であるが，図の中では簡潔な表記としている。表 2-2 でも同様である。

同じ項目について，肯定の割合（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）を示したものが，**表 2-2** である。この表には，コースごとの割合と，修了生の属性ごとの割合も示している。

どのコースの修了生についても期待が高い項目として，「1 学校改善においてリーダーシップを発揮すること」，「2 学年団，校務分掌等学校の組織化においてリーダーシップを発揮すること」，「3 教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること」，「5 授業改善においてリーダーシップを発揮すること」，「6 学習評価においてリーダーシップを発揮すること」，「13 学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること」が挙げられる。

コースごとにみると，「授業実践」の修了生に関しては，上記の項目に加えて，生徒指導面，あるいは学校と保護者の関係づくりにおけるリーダーシップへの期待が高い。「子ども支援」の修了生につい

ては，上記の項目に加えて，「7 管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること」や，「10 教育行政機関に携わること」が期待されている。ただし，「4 生徒指導においてリーダーシップを発揮すること」は 50%と，他のコースと比較して低くなっており，コース専門科目における指導の必要性が感じられる結果となっている。「教育経営」の修了生については，全ての項目で期待が高かった。

表 2-2 管理職が修了生に期待する役割（全体，コース別，属性別）

番号	項目	肯定の割合（全体）	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	学校改善に向けてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	85.0%	81.8%	75.0%	100.0%	70.0%	100.0%
2	学年団，校務分掌等学校の組織化（マネジメントの強化）においてリーダーシップを発揮すること	80.0%	72.7%	75.0%	100.0%	70.0%	90.0%
3	教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること	85.0%	81.8%	75.0%	100.0%	80.0%	90.0%
4	生徒指導においてリーダーシップを発揮すること	65.0%	63.6%	50.0%	80.0%	70.0%	60.0%
5	授業改善に向けてリーダーシップを発揮すること	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	80.0%	100.0%
6	学習評価においてリーダーシップを発揮すること	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	80.0%	100.0%
7	管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること	70.0%	54.5%	75.0%	100.0%	60.0%	80.0%
8	主幹教諭・指導教諭になること	50.0%	45.5%	50.0%	60.0%	40.0%	60.0%
9	校長・副校長・教頭になること	60.0%	45.5%	50.0%	100.0%	40.0%	80.0%
10	教育行政機関に携わること	55.0%	45.5%	75.0%	60.0%	40.0%	70.0%
11	学校と地域との関係づくりにリーダーシップを発揮すること	65.0%	54.5%	50.0%	100.0%	60.0%	70.0%
12	学校と保護者との関係づくりにリーダーシップを発揮すること	70.0%	63.6%	50.0%	100.0%	70.0%	70.0%
13	学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること	75.0%	63.6%	75.0%	100.0%	70.0%	80.0%

ストマスと現職への期待を比較すると，共通して，「1 学校改善においてリーダーシップを発揮すること」，「2 学年団，校務分掌等学校の組織化においてリーダーシップを発揮すること」，「3 教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること」，「4 生徒指導においてリーダーシップを発揮すること」，「5 授業改善においてリーダーシップを発揮すること」，「6 学習評価においてリーダーシップを発揮すること」，「7 管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること」，「11 学校と地域との関係づくりにリーダーシップを発揮すること」，「12 学校と保護者との関係づくりにリーダーシップを発揮すること」，「13 学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること」といった項目で肯定的な評価がなされている。

これに加えて現職では，「8 主幹教諭・指導教諭になること」，「9 校長・副校長・教頭になること」，「10 教育行政機関に携わること」に対する期待も高い。他方でストマスに関しては，これら 3 項目ともに肯定的な評価は低くなっていることは，上述した推測を裏付けるものであろう。なお，「子ども支援」については，現職 1 名が佐賀県教育委員会に異動となっているため，現場でのリーダーシップや，主幹教諭や管理職等になることについて回答をしにくかった可能性がある。

(3) 教職大学院に望むこと

さらに，管理職が教職大学院に望むことに関して，**図 2-3** にその結果をまとめた。各項目について，「とても重要である」，「まあ重要である」，「どちらとも言えない」，「あまり重要でない」，「全く重要でない」の 5 件法で尋ねた結果である。

このうち最も肯定の割合が高いのが，「2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート」である。この他に，「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」，「7 学校との共同研究」，「1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション」も比較的高い割合となっている。

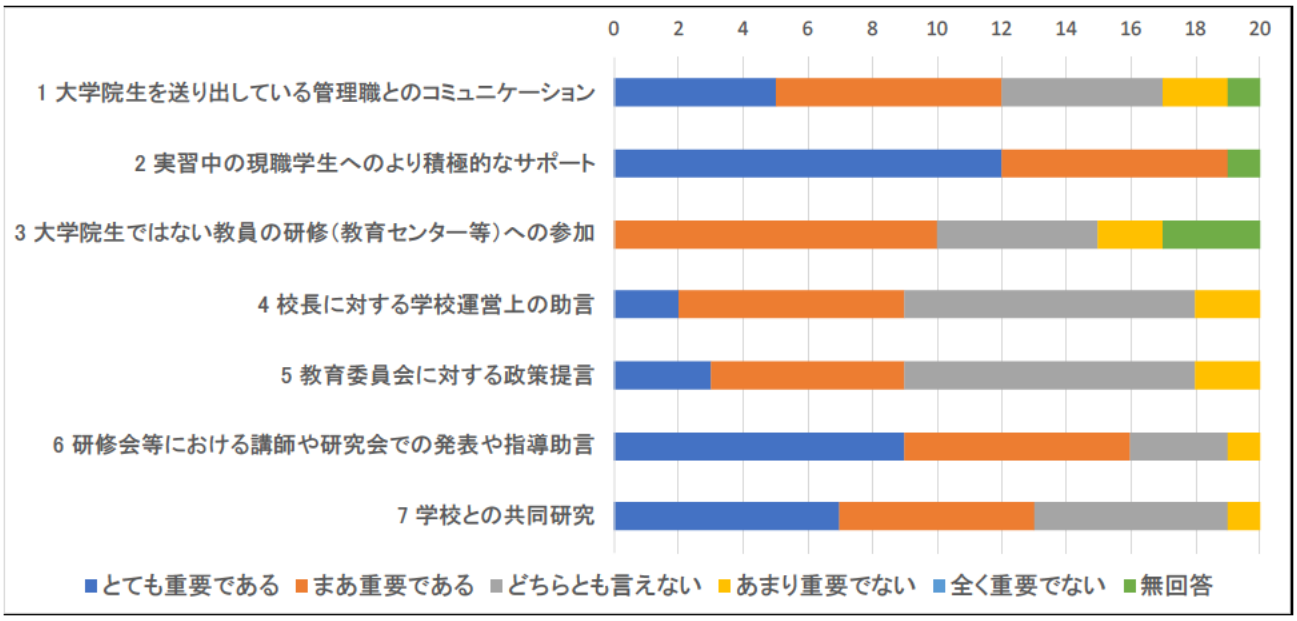

図 2-3 管理職が教職大学院に望むこと（N=20）

同じ項目について，肯定の割合（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）を示したものが，**表 2-3** である。この表には，コースごとの割合と，修了生の属性ごとの割合も示している。

表 2-3 管理職が教職大学院に望むこと（全体，コース別，属性別）

番号	項目	肯定の割合（全体）	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション	60.0%	63.6%	50.0%	60.0%	80.0%	40.0%
2	実習中の現職学生へのより積極的なサポート	95.0%	100.0%	100.0%	80.0%	100.0%	90.0%
3	大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加	65.0%	63.6%	75.0%	60.0%	70.0%	60.0%
4	校長に対する学校運営上の助言	45.0%	54.5%	0.0%	60.0%	60.0%	30.0%
5	教育委員会に対する政策提言	45.0%	45.5%	25.0%	60.0%	50.0%	40.0%
6	研修会等における講師や研究会での発表や指導助言	80.0%	90.9%	75.0%	60.0%	80.0%	80.0%
7	学校との共同研究	65.0%	63.6%	50.0%	80.0%	50.0%	80.0%

どのコースでも共通して肯定の割合が高いのは，「2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート」である。この他に，「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」，「3 大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加」，「1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション」についても，各コースでの割合が比較的高い。この他の項目については，コースごとに差がみられる結果となっている。例えば，「授業実践」では，「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」への期待が高くなっている。「子ども支援」では，「4 校長に対する学校運営上の助言」や，「5 教育委員会に対する政策提言」への期待が低くなっていた。「教育経営」は，どの項目も高いが，その

中でも「7 学校との共同研究」の割合が高い。

属性ごとにみると，現職・ストマスとも「2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート」を望む割合が高い。また，「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」についても，ストマス・現職の双方で 8 割となっている。ストマスの管理職は，「1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション」と「4 校長に対する学校運営上の助言」を望む傾向が見られる。一方，現職の管理職は「7 学校との共同研究」を望む割合が高い。

この項目に関して，教職大学院では，「4 校長に対する学校運営上への助言」や，「7 学校との共同研究」については直接的ではないにせよ，大学院生への教育を通じて間接的に実施しているものと考えることができる。しかし，今回の調査における回答率をみると，このことが学校側にきちんと伝わっていない可能性がある。また，「5 教育委員会に対する政策提言」の設問の意図が伝わっていない可能性もある。実際には，教育委員会の主催する各種委員会等で教職大学院の教員が意見を言うことも，政策提言の内容に含まれるが，そのように解釈されなかった可能性が高い。

(4) 自由記述の結果

ここでは，管理職調査の自由記述の結果をまとめておく。枠内の記述のうち，一重線は教職大学院での学習の「成果」を示すもの，波線は現在の修了生に関する様子を報告するもの，二重線は教職大学院への「要望」等を示すもの，灰色の網掛けは質問紙や調査方法に関する意見である。なお，固有名詞については，匿名性担保のため，人名を○，学校名等を●としている。

教職大学院修了生が様々な学校，教育行政等で活躍されている姿は，「素晴らしい」の一言に尽きます。

院生は，２か年の研修により，組織，チーム学校を意識した考え方を持ち，常に俯瞰した態度で学校運営及び学校教育に携わる姿勢が身に付いていくものと捉えます。それはやはり教職大学院における指導の賜物であり，各々がテーマにそった学びを実践しているからなのではないでしょうか。

教育事務所としてもいくらかの助力になればと思い，機関実習は積極的に受け入れを行っています。所員一人一人が専門分野の教科等を提示し意見交流をさせていただいたり，教育事務所（現地機関）の意義理解，業務内容，学校訪問，表簿指導等々にも携わっていただいたりしながら，学校の立場とは違う視点からの関わりについて学んでもらっています。このような積み上げが修了生のその後の大いなる成長に繋がっているのだと考えます。

教職大学院に対する意見とありますが，意見を述べられるほど実情を理解しているわけではありませんので，感想及び取組を書かせていただきました。

今後とも市町教育委員会と連携を図りながら力量ある人物の発掘供給に助力していきますので，人材育成の観点から御指導いただきますようよろしくお願いいたします。

アンケート１，２については，初任者のため，「９９　該当しない」や「３　どちらとも言えない」の回答が多くなってしまったことをご了承ください。初めての教科指導や担任で，正直，教職大学院で学んだものを生かす余裕は，あまりないように思います。ただ，教職大学院でしたいと考えていた指導方法などは，しっかりと取り組んでいることは，やはり，これまでの初任者とは違うような気がします。

今回は，卒業後したばかりの初任者でしたが，昨年度まで，前任校（●中学校）で中堅教員が教職大学院でお世話になっておりましたが，学校の課題をともに考え，学校経営の研究を進めてもらうことで，学校改善の一助になっていたと感じていました。このアンケートを機会にお伝えいたします。

ご指導をどうもありがとうございました。本人の教師力・指導力のアップはもちろんのこと，●研究の進化・発展に多くを寄与することができました。今後ともご指導をよろしくお願い申し上げます。

当該の〇教諭は，特別支援教育の手法を身につけ生徒指導に当たる，本校の現状には大変マッチした貴重な存在であり，生徒指導主事を任せている。本校の生徒指導においてリーダーシップを発揮し，問題行動発生件数が昨年度に比べて激減した。これも教職大学院での学びが実践に結び付いているからだと考える。さらに判断力（本校の現状やその場に応じたいわば特殊解）に磨きをかけ，将来の佐賀県の教育を担うリーダーへと成長してくれることを切望している。

今回のアンケートの設問１は，新規採用者については回答が難しく感じました。本校の〇教諭は，とても頑張ってくれていて感心しています。それは，教職大学院で学んだ成果であるとともに，本人の生まれながらの資質の高さにもよるものだと思います。そこで，設問１は，回答を控えさせていただきます。

教諭は，採用１年目で，悩むことも多々あると思いますが，いつも笑顔で誠心誠意尽力してくれています。その秘訣を本人にたずねたところ，「ズームで修了生同士で情報交換をして，元気とやる気をもらっています。」ということでした。修了生同士の絆に感銘を受けました。

最後になりましたが，〇教諭の熱意溢れる姿を通して，教職大学院のご指導に心から感謝をしています。子供たちのために，今後も素晴らしい修了生を育成してくださることを切にお願いいたします。

教職員大学院の佐賀県における役割に応じて，進めていただいたらと思います。佐賀県が，優秀な管理職を求めるならば，その役割を果たし，教職員課と連携する。また，県が児童生徒の指導力向上を求めるならば，学校の指導教諭や教育センター指導主事の道を開く。

●中学校において私が校長職３年目となる中で，貴院の卒業生３名が講師として本校（●中学校）で勤務してくれました（今も２名勤務中）。３名とも非常に優秀でモチベーション高く働いてくれました。生徒への対応や授業実践，分掌業務での同僚職員との協働等，どの面においても顕著な成長が見られました。これは，貴院の教育力の高さを示すものであり，現場の管理者として心から感謝申し上げます。

今後は，佐賀県の現場教師や管理職に対してもお教えをいただける機会を今以上に増やしていただければありがたいです。特に新指導要領の全面実施に伴い，現場経験の長い教師ほど新しい教育観に対しての理解不足，新しい授業実践への心理的抵抗感などが大きく，一方で新型コロナウィルス対策などで業務量が増大していることもあって，自主的に研修に取り組むことができない状況です。

また，学校をとりまく環境の激変（自然災害や新型コロナウィルス，近隣住民等からのクレーム，保護者対応の困難さ等）に対して，管理職も従来レベルの能力では学校の円滑な運営ができなくなっています。学校経営についてもご助言賜れれば幸いです。

日頃より，教育現場に優秀な人材を送り出して頂き感謝申し上げます。教職に限ったことではありませんが，私は今後は特に，自ら考えて行動できる力，チームとして仕事をしていくためのコミュニケーション能力（このコミュニケーション能力は対生徒，対保護者等においても大変必要な能力となります），謙虚に学び続ける力，そしてタフさ，などが必要になると考えています。今後とも重ねてご指導いただきますようにお願いいたします。

学校が抱えている諸課題に対する共同研究・指導・助言をしていただけると助かります。また，気軽に相談でき，双方が有益になるような関係が築ければいいのですが。

当該教諭は，貴大学院に学部卒として学んでいる。その意味で，今後は長期にわたって展望を持ちながら，冒険的な実践に果敢にチャレンジしてほしいと願っている。こうした中，大学院修了後も，大学院におかれては，研究会や情報交換会などを積極的に開催していただき，当該教諭のキャリア形成のバックアップをお願いできればと思う。

新規採用職員については，大学卒業も大学院卒業もあまり変わらないような気がします。ただ，1度現場に出て，経験を積んだうえで自分の力量を高めるために大学院を希望し研修することは，大変良いことだと思います。

今年度は，本校に初任者が１０名います。その中の１名ですので，それほど注視できていた訳ではない中の評価になったことをお許しください。
初任者としての評価ですので，該当しない部分もあります。また，低めに出ている部分があるかもしれません。基本は３としながら，特に感じたこと，期待することについて評価させていただいています。（期待をこめた部分もあります。）
今回のアンケートに際し・・・色々な情報が飛び交う中，「教職大学院」に対する我々の理解が薄い部分もあるのかなと感じました。今後は手元に入って来た「教職大学院」に関する情報をきちんと受け止め，連携していく必要性を感じました。行き届かない点があったこと，深くお詫び申し上げます。

本校職員については，新任者であり，質問の内容にそぐわない部分があるようです。できたら新任者だけの質問内容にされたほうが，回答の精度は上がるような気がします。当人は，勤務半年を過ぎたばかりの新任者で，まずは教科・学習指導に取り組んでもらっています。

特にはございません。研修の成果については，中・長期的な視点で捉えないと，なかなか把握が難しいと感じております。

まず，学びの成果（一重線）については，「チーム学校」を意識した考え方や態度・行動，学校運営面での貢献，生徒指導におけるリーダーシップ，授業実践や同僚教職員との協働という面での成長について言及がなされていた。

次に，教職大学院の要望（二重線）として，教職員や管理職に対する学習機会の提供，学校が抱える課題に対する共同研究・指導・助言，研究会や情報交換会といった修了生のキャリア形成のバックアップ，教員としての能力（自ら考えて行動できる力，チームとして仕事をしていくためのコミュニケーション能力，謙虚に学び続ける力，タフさ等）の向上が挙げられていた。

さらに，この質問紙調査や調査方法に関する意見（灰色の網掛け）に関して，学んだ成果の評価については特にストマス（初任者）の管理職から，回答しづらいことが数名から指摘された。次回に本調査を行う際には，この点を考慮する必要がある。また回答の中には，管理職として，教職大学院に関する理解ができていないことを率直に述べるものもあった。この点については，教職大学院の役割

や教育内容を，学校に対してどのように発信していくかが問われているものと考えられる。さらに，中長期的な視点で成果を捉えることの重要性も指摘されていた。

3.　修了生調査の結果

ここでは，修了生に対する質問紙調査の結果を記述する。まず，共通する項目の評価について述べ，続いて各コースの科目に関する評価について述べる。

(1)　共通する項目への評価

まず，修了生の「共通科目」（必修，及び選択必修）に関する評価をまとめたものが，**図 3-1** である。それぞれの項目において，共通科目をどの程度活かせたかを，「十分に活かせている」，「まあ活かせている」，「どちらとも言えない」，「あまり活かせていない」，「全く活かせていない」の 5 件法で尋ねた結果を示している。

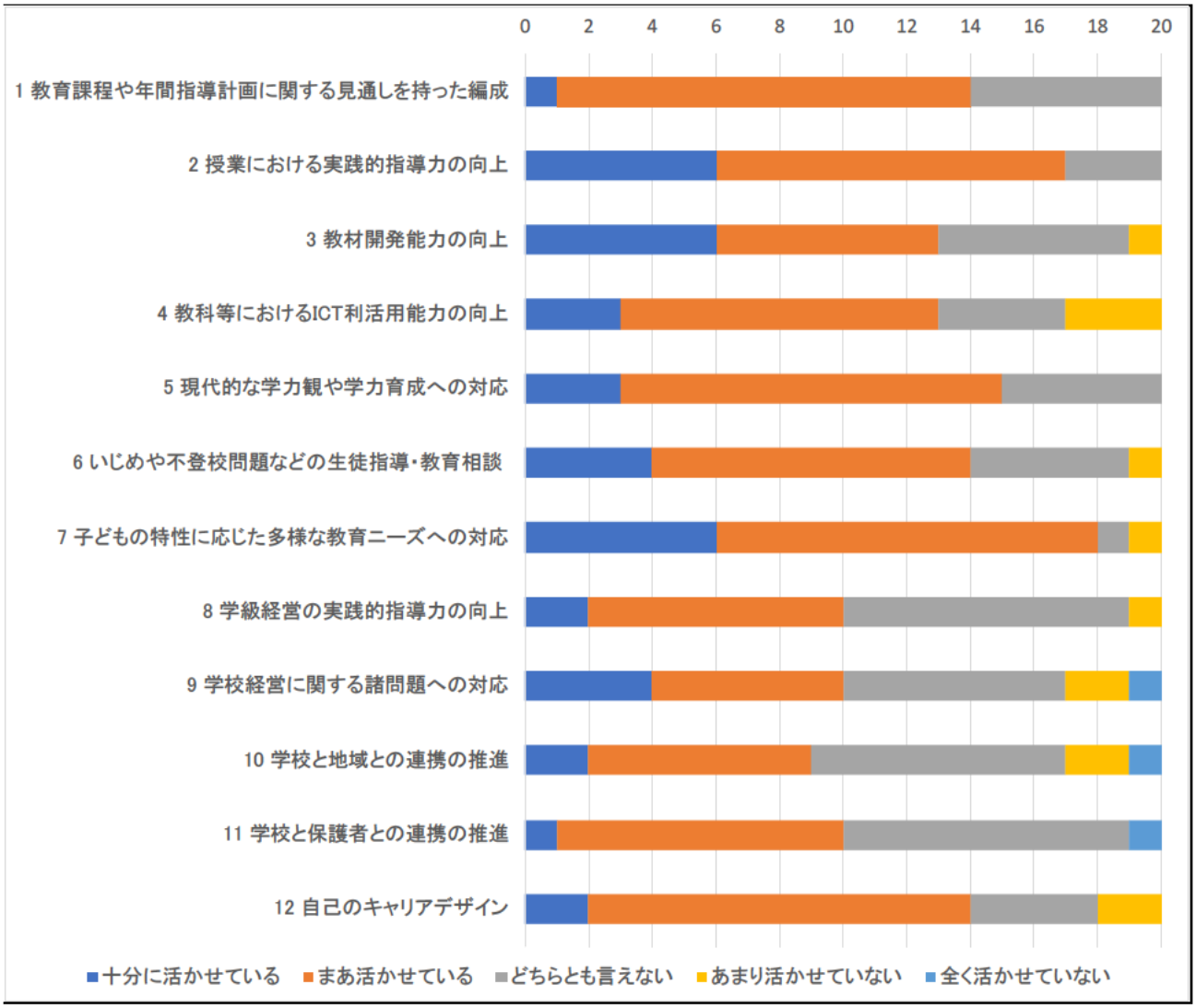

図 3-1　共通必修科目の評価（N=20）

肯定の割合が高い順に挙げると「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」（90.0%），「2 授業における実践的指導力の向上」（85.0%），「5 現代的な学力観や学力育成への対応」（75.0%），「1 教

育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」，「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」，「12 自己のキャリアデザイン」（以上，70.0%）となっていた。

一方，肯定の割合が 50%以下の項目としては，「8 学級経営の実践的指導能力の向上」，「9 学校経営に関する諸問題への対応」，「10 学校と地域との連携の推進」，「11 学校と保護者との連携の推進」が挙げられる。

同じ項目について，肯定の割合（「十分に活かせている」と「まあ活かせている」の合計）を示したものが，**表 3-1** である。この表には，コース別の割合と，修了生の属性別の割合も示している。

表 3-1 共通必修科目に関する肯定の割合（全体，コース別，属性別）

番号	項目	肯定の割合（全体）	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成	70.0%	72.7%	75.0%	60.0%	70.0%	70.0%
2	授業における実践的指導力の向上	85.0%	90.9%	75.0%	80.0%	90.0%	80.0%
3	教材開発能力の向上	65.0%	81.8%	50.0%	40.0%	80.0%	50.0%
4	教科等におけるICT利活用能力の向上	65.0%	72.7%	75.0%	40.0%	80.0%	50.0%
5	現代的な学力観や学力育成への対応	75.0%	54.5%	100.0%	100.0%	70.0%	80.0%
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談	70.0%	54.5%	100.0%	80.0%	60.0%	80.0%
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応	90.0%	81.8%	100.0%	100.0%	80.0%	100.0%
8	学級経営の実践的指導力の向上	50.0%	54.5%	50.0%	40.0%	50.0%	50.0%
9	学校経営に関する諸問題への対応	50.0%	27.3%	75.0%	80.0%	30.0%	70.0%
10	学校と地域との連携の推進	45.0%	18.2%	50.0%	100.0%	30.0%	60.0%
11	学校と保護者との連携の推進	50.0%	36.4%	50.0%	80.0%	40.0%	60.0%
12	自己のキャリアデザイン	70.0%	54.5%	75.0%	100.0%	50.0%	90.0%

コースごとにみると，「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」や，「2 授業における実践的指導力の向上」，「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」については，どのコースでも高い割合を示している。これ以外の項目については，コースごとに回答の傾向が異なる。

「授業実践」では，上記の項目以外に，「3 教材開発能力の向上」や，「4 教科等における ICT 利活用能力の向上」が高い割合を示す一方で，「10 学校と地域との連携の推進」に関しては，2 割以下となっている。このコースの傾向として，授業における実践的指導力や教材開発能力の向上が高くなっており，この点は探究実習を中心とした科目の成果と捉えることができる。学校経営や地域・保護者との連携に関しては肯定的な回答の割合が低いが，初任者（ストマス）が約 8 割を占める授業実践では致し方のないことだと考えられる。

「子ども支援」では，上記のどのコースでも共通して高い項目以外に，「5 現代的な学力観や学力育成への対応」，「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」が高い割合を示している。この他に，「4 教科等における ICT 利活用能力の向上」，「9 学校経営に関する諸問題の対応」，「12 自己のキャリアデザイン」の割合も高い。このコースにおいて，「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」の項目で肯定的な回答が最も多いのは，「特別支援教育の基礎と課題」（コース教員の担当する共通必修科目）が肯定的に評価されているものと考えられる。「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」や「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」の肯定率が 100%であるのは，コースでの学びのニーズと共通必修科目の内容が一致しているからだと思われる。

「教育経営」では，「5 現代的な学力観や学力育成への対応」，「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」，「9 学校経営に関する諸問題の対応」，「12 自己のキャリアデザイン」が高い割合を示している他，「10 学校と地域との連携の推進」，「11 学校と保護者との連携の推進」についても肯定の割合が高い。このうち，9，10，11，12 の項目に該当する科目はコース教員が担当しており，コースに

おける学びのニーズとも合致していたものと考えられる。

次に，属性ごとにみると，「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」，「2 授業における実践的指導力の向上」，「5 現代的な学力観や学力育成への対応」，「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」，「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」といった項目が，ストマスと現職で共通して高い割合を示していた。

「3 教材開発能力の向上」や「4 教科等における ICT 利活用能力の向上」については，ストマスの方が肯定の割合が高い。一方，「12 自己のキャリアデザイン」，「9 学校経営に関する諸問題の対応」，「10 学校と地域との連携の推進」，「11 学校と保護者との連携の推進」については，現職教員の方が肯定の割合が高い。この中でも，特に現職において「12 自己のキャリアデザイン」の評価が高いことから，自己のキャリアをふり返る上での有効な機会となっていることがうかがえる。

上でみたように，「8 学級経営の実践的指導力の向上」については，どのコースでも，あるいは現職とストマス双方において，評価が高くない。これに関連して，後述する表 3-8，表 3-10 でも学級経営関連の項目の評価は低くなっている。この項目は，生活指導・生徒指導に関わるものである。これらの項目で肯定的な回答の割合が低いことは，共通必修科目「授業づくりと学級経営の基礎と課題」という授業のあり様とも関連することが考えられる。そう考えると，これは主に「授業実践」に関わる検討事項を提示していることになるが，他方で，子ども同士のトラブル解決や問題行動を起こす子どもへの対応を「学級」としてどうするのかと考えたとき，個々の子どもの特性に応じた対応を検討するという意味では「子ども支援」が，「危機管理への対応」の一環と考えれば「教育経営」が，それぞれ「学級経営」を大学院の授業にどう組み込むのかを考える必要があるとも言えよう。

次に，教職大学院の施設・設備や，学生生活に関する満足度を尋ねた結果を**図 3-2** に示した。各項目につき，「とても満足している」，「まあ満足している」，「どちらとも言えない」，「あまり満足していない」，「全く満足していない」の 5 件法で尋ねたものである。これをみると，どの項目についても満足度が高いが，「5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流」や，「4 教員チームによる学生指導」が特に高い割合を示していた。

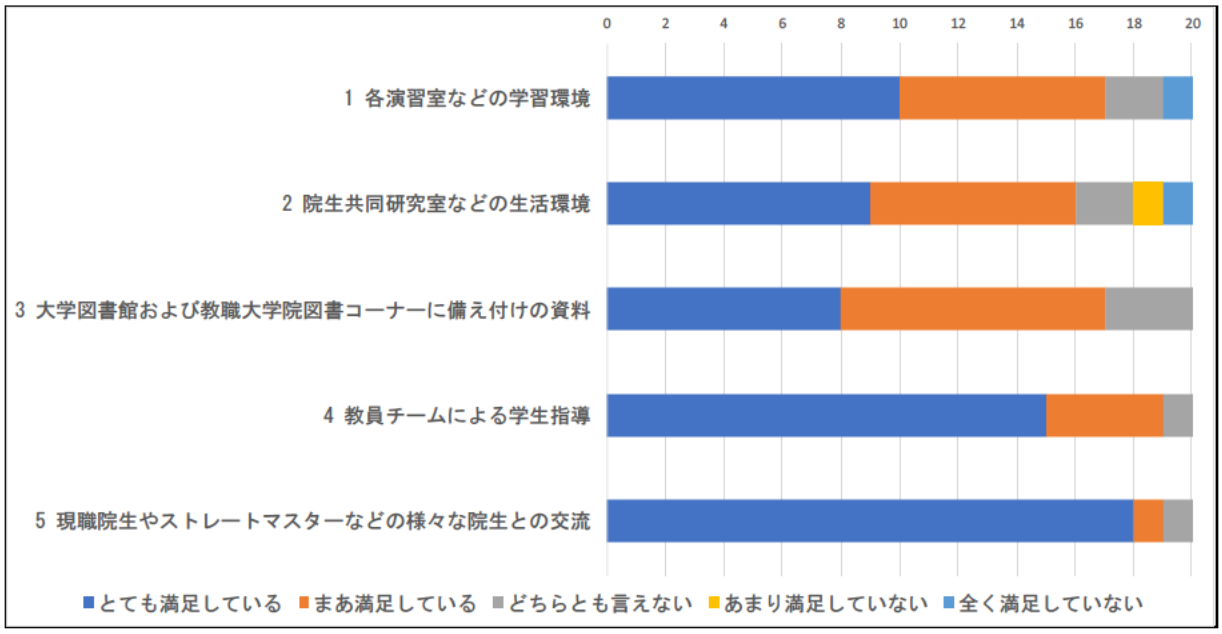

図 3-2 大学院の施設・設備や学生生活に関する満足度（N=20）

同じ項目について，「とても満足している」と「まあ満足している」の合計の割合を示したものが，**表 3-2** である。この結果では，コースごと，あるいは属性ごとの差はほとんどみられず，一律に高い割合となっている。ただし，「2 院生共同研究室などの生活環境」については，コースや属性による差がみられる。指導面や院生同士の交流への満足度は高い一方で，施設・整備面での継続的な改善が必要であると考えられる。

表 3-2 大学院の施設・設備や学生生活に関する満足度（全体，コース別，属性別）

番号	項目	肯定の割合（全体）	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	各演習室などの学習環境	85.0%	90.9%	75.0%	80.0%	90.0%	80.0%
2	院生共同研究室などの生活環境	80.0%	90.9%	75.0%	60.0%	90.0%	70.0%
3	大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	85.0%	90.9%	75.0%	80.0%	90.0%	80.0%
4	教員チームによる学生指導	95.0%	90.9%	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%
5	現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	95.0%	100.0%	100.0%	80.0%	100.0%	90.0%

さらに，**図 3-3** に，教職大学院で学んだ成果を示した。この設問の内容は，図 2-1 で示した管理職調査と同じものであり，各項目について「とてもそう思う」，「まあそう思う」，「どちらとも言えない」，「あまりそう思わない」，「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねた結果である。ただし，管理職の調査項目に，「28 学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった」，「29 研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった」という 2 項目を加えている。なお，「子ども支援」では，ストマスに対する設問を，4，8，15，18，19，20，21，22，23，24，28，29，30 の 13 項目に絞っている。

この成果に関して，全体で肯定の割合が 9 割を超える項目としては，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」（100.0%），「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」（ともに 95.0%），「3 学校を『組織』として見られるようになった」（90.0%）が挙げられる。「30 全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている」とする割合も 9 割となっていた。

この他に肯定の割合が 8 割を超える項目として，「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」（ともに 85.0%），「1 学校全体の視野で，物事を見られるようになった」，「2 社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった」，「5 学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった」，「7 学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった」，「21 教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった」，「23 学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった」（以上，80.0%）という項目が挙げられる。

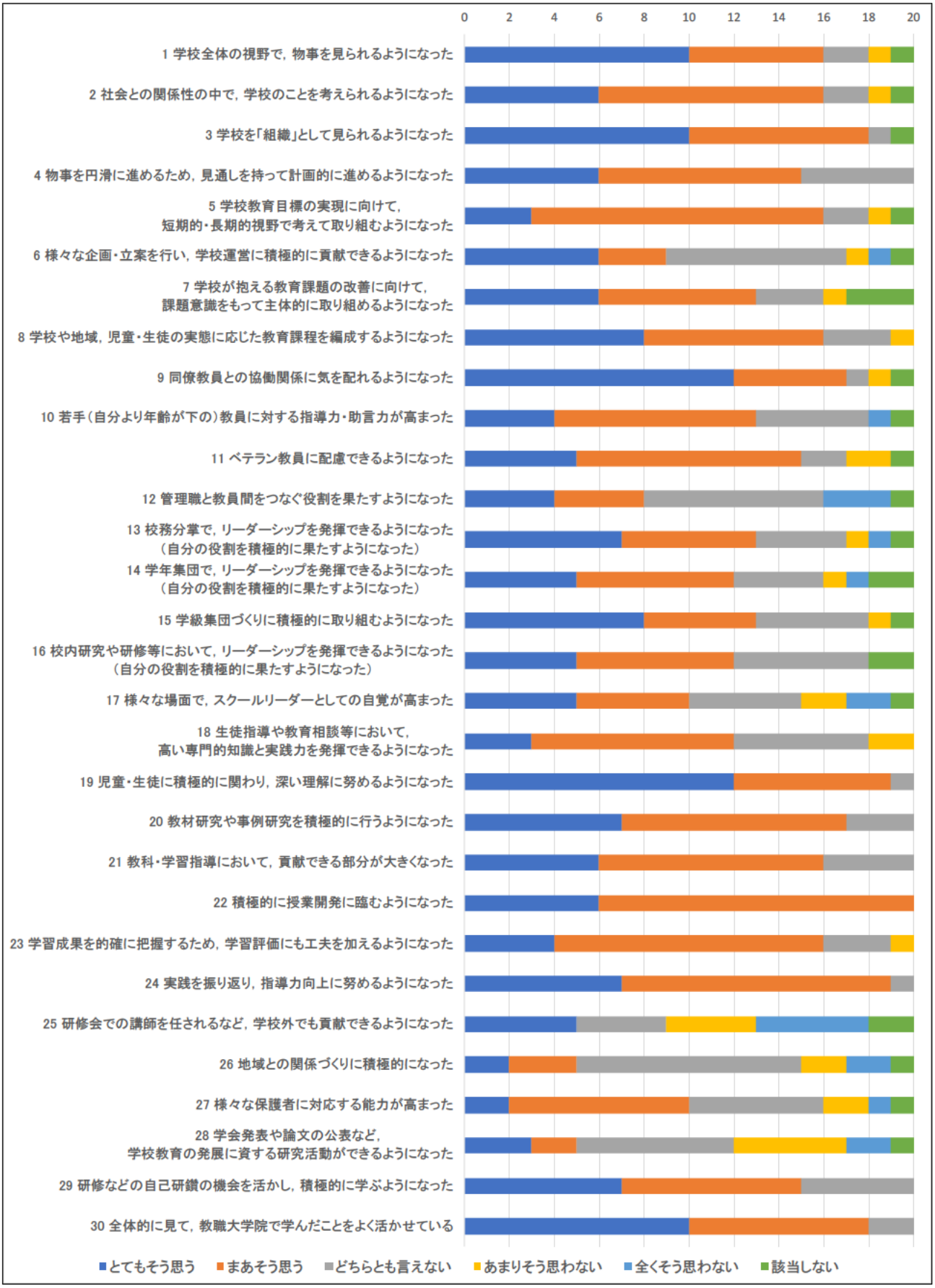

図 3-3 教職大学院で学んだ成果（N=20）

同じ項目について，肯定の割合（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）を示したものが，

表 3-3 である。

表 3-3 教職大学院で学んだ成果（全体，コース別，属性別）

番号	項目	肯定の割合（全体）	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	80.0%	72.7%	75.0%	100.0%	60.0%	100.0%
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	80.0%	72.7%	75.0%	100.0%	60.0%	100.0%
3	学校を「組織」として見られるようになった	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	80.0%	100.0%
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	75.0%	63.6%	100.0%	80.0%	60.0%	90.0%
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	80.0%	72.7%	75.0%	100.0%	60.0%	100.0%
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	45.0%	9.1%	75.0%	100.0%	10.0%	80.0%
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	80.0%	72.7%	75.0%	100.0%	60.0%	100.0%
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	65.0%	63.6%	50.0%	80.0%	50.0%	80.0%
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	85.0%	81.8%	75.0%	100.0%	70.0%	100.0%
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高まった	65.0%	45.5%	75.0%	100.0%	30.0%	100.0%
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	75.0%	72.7%	75.0%	80.0%	60.0%	90.0%
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	40.0%	9.1%	75.0%	80.0%	0.0%	80.0%
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	65.0%	45.5%	75.0%	100.0%	30.0%	100.0%
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	60.0%	45.5%	75.0%	80.0%	30.0%	90.0%
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	65.0%	63.6%	75.0%	60.0%	60.0%	70.0%
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	60.0%	54.5%	75.0%	60.0%	40.0%	80.0%
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	50.0%	18.2%	75.0%	100.0%	10.0%	90.0%
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	60.0%	36.4%	100.0%	80.0%	30.0%	90.0%
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	95.0%	90.9%	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	85.0%	81.8%	100.0%	80.0%	80.0%	90.0%
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	80.0%	72.7%	100.0%	80.0%	70.0%	90.0%
22	積極的に授業開発に臨むようになった	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	80.0%	72.7%	100.0%	80.0%	80.0%	80.0%
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	95.0%	90.9%	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	25.0%	0.0%	50.0%	60.0%	0.0%	50.0%
26	地域との関係づくりに積極的になった	25.0%	18.2%	25.0%	40.0%	10.0%	40.0%
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	50.0%	27.3%	75.0%	80.0%	20.0%	80.0%
28	学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった	25.0%	18.2%	50.0%	20.0%	30.0%	20.0%
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった	75.0%	81.8%	75.0%	60.0%	80.0%	70.0%
30	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	90.0%	81.8%	100.0%	100.0%	80.0%	100.0%

コースごとにみると，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」は，全てのコースで 8 割以上の回答の割合となっている。「30 全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている」ことへの評価も，全ての

コースで 8 割以上の割合となっていた。

この他にも多くの項目で肯定の割合が高くなっているが，灰色の網掛け部分に示すように，一部の項目については評価が分かれる。例えば「授業実践」では，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」，「19 の児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に務めるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」等の，指導力向上に関する項目について肯定的割合が高くなっており，これらの項目について成果を感じていることが分かる。また，「3 学校を『組織』として見られるようになった」や，「29 研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった」について肯定的割合が高い。その反面，学校運営やスクールリーダーに関する項目は低い。「授業実践」は約 8 割がストマスなので，このような自己評価の結果になったものと思われる。

属性ごとにみると，「3 学校を『組織』として見られるようになった」，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」，「23 学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」という項目が，ストマス・現職で共通して 8 割以上の肯定の割合となっている。「30 全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている」についても，ストマス・現職ともに 8 割以上が肯定的な評価である。

ストマスに関しては，灰色の網掛け部分に示されているように，「6 様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった」，「12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった」，「17 様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった」，「25 研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった」，「26 地域との関係づくりに積極的になった」，「27 様々な保護者に対応する能力が高まった」が 2 割以下となっている。他方で，生徒理解や指導力向上，授業や学級集団づくりへの積極的関与については評価が高い傾向がみられる。現職では，「28 学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった」に関する割合が低いが，それ以外のほぼ全ての項目で高い評価がなされている。

ここまで見てきたように，評価の低い項目はコースで言えば「授業実践」，属性で言えばストマスに多くみられる。ストマス 10 名のうち 9 名が「授業実践」であることに鑑みると，肯定的評価の割合の低さは，コース内のストマスの割合に起因すると考えられる。当該質問項目が若手教員向けというよりも，ミドル以上の教員に求められる能力の向上に関するものであるため，年齢や経験年数上，このような肯定的評価の割合になることはやむを得ない部分がある。

なお，こうした問いに関しては，今後，教職大学院の授業や指導内容との関連についての考察を行うことが不可欠である。これは，表 2-1 についても同様である。例として，「子ども支援」についてみてみると，多くの項目で肯定的な評価が多くなっている。具体的には，30 項目中 26 項目が 75.0%以上となっている。特に「4 物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった」，「18 生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった」，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」，「21 教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった」，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」といった項目は 100%の評価となっている。これは，管理職の評価でも同様の結果であり，コース専門科目や実習指導等を通しての指導が功を奏しているのではないかと考えられる。ただし，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」，「23 学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった」の項目は管理職の評価より高くなっているため，自己評価が甘くなっていないか，どのようになればこれらの力が高まったと言えるのかを客観的に検

討する視点等を指導していかなければならないだろう。さらに，「26 地域との関係づくりに積極的になった」については肯定率が低いが（25%），コース専門科目等においても，地域との連携について指導していく必要がある。

(2)　コースごとの評価

ここでは，コースごとに設問が異なる調査の結果を示す。

まず，各コースの専門科目の評価を示したものが，**表 3-4**（授業実践），**表 3-5**（子ども支援），**表 3-6**（教育経営）である。専門科目を受講して，以下に挙げる力が身についたかを「とても身についた」，「まあ身についた」，「どちらとも言えない」，「あまり身につかなかった」，「全く身につかなかった」の 5 件法で尋ねた結果である。「授業実践」と「子ども支援」には現職とストマスの双方が所属しているため，表 3-4 と表 3-5 においては，上段に全体の割合を示し，下段の左にストマス，下段の右に現職の回答の割合を示した。「教育経営」には現職しか所属していないため，表 3-6 については上下段に分けることはしていない。

表 3-4 授業実践コースの専門科目の評価（全体：N=11，ストマス：N=9，現職：N=2）

番号	項目	とても身についた		まあ身についた		肯定の割合（合計）	
1	学力と学習評価について考察する力	36.4%		36.4%		72.7%	
		33.3%	50.0%	33.3%	50.0%	66.7%	100.0%
2	授業を実践し目的に応じて分析する力	54.5%		45.5%		100.0%	
		55.6%	50.0%	44.4%	50.0%	100.0%	100.0%
3	各教科の授業における指導力	27.3%		63.6%		90.9%	
		22.2%	50.0%	77.8%	0.0%	100.0%	50.0%
4	各教科の内容について研究する力	36.4%		63.6%		100.0%	
		33.3%	50.0%	66.7%	50.0%	100.0%	100.0%
5	それぞれの専門教科の教材と学習評価を開発する力	27.3%		54.5%		81.8%	
		33.3%	0.0%	44.4%	100.0%	77.7%	100.0%
6	それぞれの専門教科の教材と学習評価を省察する力	54.5%		27.3%		81.8%	
		55.6%	50.0%	33.3%	0.0%	88.9%	50.0%

表 3-5 子ども支援コースの専門科目の評価（全体：N=4，ストマス N=1，現職：N=3）

番号	項目	とても身についた		まあ身についた		肯定の割合（合計）	
1	不登校やいじめなどに対して，複数の具体的なアプローチを考える力	75.0%		25.0%		100.0%	
		0.0%	100.0%	100.0%	0.0%	100.0%	100.0%
2	児童生徒の学習意欲や態度について，心理学的な観点からの理解	75.0%		25.0%		100.0%	
		100.0%	66.7%	0.0%	33.3%	100.0%	100.0%
3	発達障害のある児童生徒に対して，ニーズに応じて教室でできる複数の具体的なアプローチを考える力	75.0%		25.0%		100.0%	
		100.0%	66.7%	0.0%	33.3%	100.0%	100.0%
4	自殺予防教育やストレスマネジメント教育などの心理教育を具体的に実践する力	25.0%		50.0%		75.0%	
		0.0%	33.3%	100.0%	33.3%	100.0%	66.7%
5	地域における特別支援教育の相談機関や制度などについての理解	50.0%		50.0%		100.0%	
		0.0%	66.7%	100.0%	33.3%	100.0%	100.0%
6	児童福祉のあり方，及び児童福祉と教育の関連性や連携のあり方に関する理解	50.0%		50.0%		100.0%	
		0.0%	66.7%	100.0%	33.3%	100.0%	100.0%
7	生徒指導の機能を活用し，子どもに自己指導能力と社会的リテラシーを育成する力	100.0%		0.0%		100.0%	
		100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
8	子どもを対象とした知能，パーソナリティ，メンタルヘルスおよび学級集団に関するアセスメント手法を理解し，学校現場で活用できる力	75.0%		25.0%		100.0%	
		100.0%	66.7%	0.0%	33.3%	100.0%	100.0%

表 3-6 教育経営コースの専門科目の評価（N=5）

番号	項目	とても身についた	まあ身についた	肯定の割合（合計）
1	学校を「組織」として捉える視点	100.0%	0.0%	100.0%
2	現任校の諸課題を構造的に理解する能力	100.0%	0.0%	100.0%
3	現任校における自分の位置付けを相対化できる能力	40.0%	60.0%	100.0%
4	現任校の課題を解決するための組織づくりの方法	80.0%	20.0%	100.0%
5	学校組織におけるリーダーシップの重要性	100.0%	0.0%	100.0%
6	ミドルリーダーとして学校改善のために行動する能力	80.0%	20.0%	100.0%
7	教職員の「協働」の重要性への理解	100.0%	0.0%	100.0%
8	学校教育目標に関する短期的・長期的な視点	60.0%	40.0%	100.0%
9	教員評価や学校評価など，自らの活動への評価に関する理解	40.0%	60.0%	100.0%
10	地域や保護者との連携を推進する力	20.0%	80.0%	100.0%
11	学校における危機管理能力	60.0%	40.0%	100.0%

これらの表を見ると，「授業実践」のストマスでは，学力と学習評価，教材開発等に関する力が，「子ども支援」では心理教育を具体的に実践する力が，他の項目より評価が低いといった傾向は見られるが（表 3-4），それ以外は各コースでいずれの科目も高い評価がなされていることがわかる。ただし，これは修了生の意識上のことである。現任校の実践に反映されているかは，表 2-1 の管理職の評価とも合わせて検討する必要がある。

次に，各コースの実習科目に関する評価を示したものが，**表 3-7**（授業実践・現職），**表 3-8**（授業実践・ストマス），**表 3-9**（子ども支援・現職），**表 3-10**（子ども支援・ストマス），**表 3-11**（教育経営）である。ここでは「とても身についた」，「まあ身についた」の合計の肯定の割合のみを示している。

表 3-7 授業実践コース（現職）の実習科目の評価（N=2）

番号	項目		肯定の割合
1	異校種実習	異校種の教育活動に対する理解	100.0%
2		異校種における授業実践に対する理解	100.0%
3		異校種における児童・生徒に対する理解	50.0%
4		異校種における教師文化に対する理解	100.0%
5	学校変革試行実習	学校の課題について把握する能力	100.0%
6		理論を活用して学校変革の計画を立てる能力	50.0%
7		計画に即して授業研究を行う能力	100.0%
8		授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力	100.0%

表 3-8 授業実践コース（ストマス）の実習科目の評価（N=9）

番号	項目		肯定の割合
1	基盤実習	教科等指導力	77.8%
2		児童生徒とのコミュニケーション力	77.8%
3		特別な配慮を要する児童生徒へのケア	77.8%
4		学級経営力	22.2%
5	学校課題探究実習	教科等指導力	88.9%
6		児童生徒とのコミュニケーション力	88.9%
7		計画に即して授業研究を行う能力	88.9%
8		授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力	100.0%

表 3-9 子ども支援コース（現職）の実習科目の評価（N=3）

番号	項目		肯定の割合
1	関係機関実習	関係機関（児童相談所，適応指導教室）の役割や職務に対する理解	100.0%
2		関係機関（児童相談所，適応指導教室）の職務と学校の課題の関係性に対する理解	100.0%
3		学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解	100.0%
4		学校外での人的ネットワークの形成	100.0%
5	学校変革試行実習	現任校の課題に即した組織づくりの能力	66.7%
6		計画を立てて改革を進める能力	100.0%
7		現任校の課題に即した問題解決能力	100.0%
8		実践の中で，問題の構造への理解を深めていく能力	100.0%
9		リサーチプランを立てて，研究を実施する能力	100.0%
10		スクールリーダーとしての教育実践力・指導力	100.0%

表 3-10 子ども支援コース（ストマス）の実習科目の評価（N=1）

番号	項目		肯定の割合
1	基盤実習	教科等指導力	100.0%
2		児童生徒とのコミュニケーション力	100.0%
3		特別な配慮を要する児童生徒へのケア	100.0%
4		学級経営力	0.0%
5	学校課題探究実習	教科等指導力	100.0%
6		児童生徒とのコミュニケーション力	100.0%
7		特別な配慮を要する児童生徒へのケア	100.0%
8		学級経営力	0.0%

表 3-11 教育経営コースの実習科目の評価（N=5）

番号		項目	肯定の割合
1	関係機関実習	教育委員会の役割や職務に対する理解	100.0%
2		教育委員会の職務と学校の課題の関係性に対する理解	100.0%
3		学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解	100.0%
4		学校外での人的ネットワークの形成	80.0%
5	学校変革試行実習	現任校の課題に即した組織づくりの能力	80.0%
6		計画を立てて改革を進める能力	80.0%
7		現任校の課題に即した問題解決能力	100.0%
8		実践の中で，問題の構造への理解を深めていく能力	100.0%
9		リサーチプランを立てて，研究を実施する能力	80.0%
10		スクールリーダーとしての教育実践力・指導力	80.0%

ここで取り上げた実習科目についても，各コースの指導目的に合致する項目は肯定的な評価となっており，現職院生における関係機関実習や学校変革試行実習，ストマスの基盤実習や学校課題探究実習への指導は，比較的円滑に行われているものと考えられる。なお，表 3-7 の「授業実践」の現職は 2 名のみなので個々の状況にもよると考えられるが，異校種実習における児童生徒理解や，学校変革の計画が難しいと想定されるため，今後の指導上の課題になると言える。

また，表 3-8 の 4 や，表 3-10 の 4 や 8 で，ストマスにおける「学級経営力」が低い評価となってい

るが，この解釈には，まず実習の中で，担任として児童生徒に関わるわけではないことに留意が必要である。さらに，表 3-1 の「8 学級経営の実践的指導力の向上」の項で述べたように，学級経営力については，日常の授業の中でより明確に位置づけることが求められており，そうした中で今後，基盤実習や学校課題探究実習において，学級経営に目を向けさせるような工夫が必要ではないかと考えられる。特に大学院であることに鑑みると，通常の学部の教育実習生よりも深く学級経営に関わる方法がないかを検討することが重要である。そうすることによって教員の子どもに対する接し方や，調停の方法等をよく観察し，省察するように指導する等，学級経営力を高める方法を見出すことができるかもしれない。いずれにせよ，本項目については，今後，経年的な変化を追跡していく等，縦断的な研究が求められるだろう。

続いて，各コースの目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価を示したものが，**表 3-12**（授業実践・現職），**表 3-13**（授業実践・ストマス），**表 3-14**（子ども支援・現職），**表 3-15**（子ども支援・ストマス），**表 3-16**（教育経営）である。ここでも，肯定の割合のみを示している。

表 3-12 授業実践コース（現職）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=2）

番号	項目		肯定の割合
1	目標設定確認科目	現任校の課題を発見･分析する能力	50.0%
2		授業に関わる理論研究と，現任校の課題を結びつける能力	50.0%
3		自らの授業に関わる課題に対する改善策を立案する能力	50.0%
4		達成目標を設定し，客観的な資料やデータを収集する能力	100.0%
5	目標達成確認科目	授業に関わる研究課題に応じた授業改善を行う能力	100.0%
6		自己の授業改善の実践について，理論と実践の往還によって考察を深める能力	100.0%
7		自己の授業実践を評価することができる能力	100.0%

表 3-13 授業実践コース（ストマス）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=9）

番号	項目		肯定の割合
1	目標設定確認科目	自らの課題を発見･分析する能力	66.7%
2		理論研究と，自らの課題を結びつける能力	66.7%
3		課題に対する改善策を立案する能力	88.9%
4		達成目標を設定し，客観的な資料やデータを収集する能力	66.7%
5	目標達成確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	88.9%
6		自らの課題に対する改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	100.0%
7		自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

表 3-14 子ども支援コース（現職）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=3）

番号	項目		肯定の割合
1	目標設定確認科目	現任校の課題を発見･分析する能力	100.0%
2		理論研究と，現任校の課題を結びつける能力	66.7%
3		課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
4		学校改善の過程を構造して捉える能力	66.7%
5	目標達成確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	66.7%
6		自己の学校改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	66.7%
7		自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

表 3-15 子ども支援コース（ストマス）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=1）

番号	項目		肯定の割合
1	目標設定確認科目	自らの課題を発見･分析する能力	100.0%
2		理論研究と，自らの課題を結びつける能力	100.0%
3		課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
4		達成目標を設定し，客観的な資料やデータを収集する能力	100.0%
5	目標達成確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	100.0%
6		自らの課題に対する改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	100.0%
7		自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

表 3-16 教育経営コース（現職）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=5）

番号		項目	肯定の割合
1	目標設定確認科目	現任校の課題を発見･分析する能力	100.0%
2		理論研究と，現任校の課題を結びつける能力	100.0%
3		課題に対する改善策を立案する能力	80.0%
4		学校改善の過程を構造して捉える能力	100.0%
5	目標達成確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	80.0%
6		自己の学校改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	80.0%
7		自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

「授業実践」については，現職の対象者が 2 名で学校種や個々の状況が異なるため，解釈が難しいが，現任校の課題把握やその改善という点に課題があることが分かる（表 3-12）。ストマスについては，自らの課題把握や理論研究との結びつけにおいて課題があることが分かる（表 3-13）。「子ども支援」及び，「教育経営」に関する表 3-14 から表 3-16 をみると，総じて，目標設定や目標達成に関する科目の評価が高いことがうかがえる。しかし，表 3-14，表 3-16 における現職の評価では，リサーチ・クエスチョンに対して答えを見出す能力や，自己の実践を相対化していく能力に関して課題があることが分かる。

(3) 自由記述の結果

ここでは，修了生調査の自由記述の結果をコースごとに掲載する。枠内の記述のうち，一重線は学習の「成果」を示すもの，点線は現在の「悩み」を，二重線は教職大学院の「課題」を示すものである。なお，「子ども支援」の修了生の自由記述は，記載されていなかった。

まず，「授業実践」の自由記述の結果をみていく。学習の成果（一重線）をみると，異なる校種や専門教科を持った院生との出会いにより，学習への動機づけや，異なる教科の実践や考えを学ぶ機会になったこと，さらに現在でも相談できる関係性の形成につながっていることが読み取れる。また，教職員としての基礎が形成されたという記述もみられた。

教職大学院の課題（二重線）としては，修了後も大学院とのつながりを保つことのできるシステムや機会，学級経営や道徳の授業開発に関するカリキュラム，実習先との共通認識の形成という点が挙げられていた。また，大学院での学びを現任校で活かすことの難しさも指摘されていた。ただし，教職大学院における教育と，教育センター等による各種の研修との違いを考えると，学級経営や各教科の内容習得をめざすような実践的指導力向上が期待されることは限界があるかもしれない。また，教職大学院と実習先の学校との共通認識が図られていないということに対しては，改善を図るために実習校訪問や実習校でのリフレクション，ゼミ等を行っているので，その場で問題を抱えていることを表出してもらうことが，この実習システムの前提となる。このため，リフレクションの方法も含めて，

教職大学院と学校との共通認識をどう形成するかは今後の検討課題と言える。

教職大学院における２年間の学びは，とても充実したものでした。教職大学院では，異なる校種や専門教科をもった先生方と出会うことができ，自分が知らないことをたくさん吸収することができました。他大学からの進学だったため，はじめは不安ばかりでしたが，同じ目標をもって学ぶ仲間に出会うことができ，教育についてみんなで学びを深めていきたいという気持ちが２年間を通して膨らんでいきました。また，専門教科をもっていない私にとっては，様々な専門教科を持つ先生方の実践や考えを見たり聞いたりする中で，教科の特性をまんべんなく学ぶことができ，勤務している小学校での日々の授業に生かすことができています。本当に恵まれた環境の中で２年間を過ごすことができました。

大学院を修了し，早くも半年が経ちました。実際に現場で働き始めて，忙しさとやりがいを感じながらも必死に頑張れているのは，大学院での学びによって教職員としての基礎を作ることができたからなのかなと感じています。そして，なにより良かったと感じたことは，仕事で悩んだ時に気軽に相談することができる同期や現職の先生方とのつながりができたことです。以上のことから，私は大学院に進学して良かったと思っています。なので，修了したから終わりではなく，これからも学び続けるために，大学院とのつながりを保ち続けることができるシステムや機会があれば大変嬉しいです。現在は学級経営や道徳の授業開発に悩みを抱えています。大学院のカリキュラムの中でもっと取り扱っていただき，学びを深めたかったです。

大学院で現職の先生方と同じ教室で学んだ経験を活かし，自分のできる範囲で現在勤めている学校に貢献できていると思うので，教職大学院に進学して良かったと思います。

難しいことであると思いますが，教職大学院と実習先の学校との共通認識が図られていない場面が時折見受けられました。もちろん，メンターの先生や管理職とは，話をする中で意思疎通を図っていましたが，前もって実習の目的や内容等についての共通認識を図っていただければ，さらにスムーズに実習に臨むことができていたのではないかと思います。

初任者という立場で，教職大学院で学んだことを学校現場で活かすというのはなかなか難しいなと感じます（学んだことと先輩教諭の意見の違いなど）。学んだことを活かしたいけど活かしきれていないというもどかしい気持ちがあります。１の回答ではそういう意味合いで，「どちらともいえない」という回答が多くなりました。

教職大学院に派遣していただき，多くの学びの機会をいただいたことを修了してから改めて感謝しております。充実した２年間だったと思います。

教職大学院での学びを生かして，今後も頑張りたいと思います。

次に，「教育経営」の自由記述の結果をみていく。学習の成果（一重線）としては，学校を組織的に見られるようになったこと，学校改善を進める実践力，自身のキャリアデザインを考えられたこと，教育学の理論を学べたこと，大学院での教員や院生との出会い等が挙げられていた。一方で教職大学

院の課題（二重線）として，2 年間の研究計画を立てやすくするような指導方法や，学習評価に関する学びの機会を増やすことが挙げられていた。2 年間の指導計画については，2020 年度より各科目や実習の関係を構造化した形でわかりやすく示すようにしているが，学習評価については今後どのように位置づけるか検討の余地がある。

教職大学院での経験から，学校を様々な視点で見ることができるようになったことが一番の成果だと感じています。すべては子どもたちのために学校がどうあるべきか，どう組織として動いていけばいいのか，自身の課題研究を通して学ぶことができました。また，関係機関実習での経験が自分のキャリアデザインという点で大きく作用したことは間違いありません。短い期間ではありますが，大変多くのものを得ることができました。学生生活には大変満足していますが，教職大学院の２年間の研究のイメージや，提出物等の見通しを持てるようにしていただくと，より計画的に進めることができたのかと思います。今，子どもの学ぶ意欲について考えることが多いです。また，学習評価についても研修会が多く持たれています。その点についてもさらに学べるといいなと思いました。

私は佐賀大学教職大学院で学ぶ機会を得，自分を大きく変えることができたと実感している。以前は専ら個業を行ってきたが，修了後は学校教育を俯瞰的に見て，協働と組織マネジメントにより学校改善を行う実践力がついたと考える。この経験は，私の教職人生の分水嶺となり，金の思い出となっている。

教職大学院での２年間は大変有意義な経験であった。学校現場を離れ，自由に学べることはとても贅沢な時間であり，自身のこれまでを振り返り，これからの教員人生について考えるきっかけとなった。また，ここで学んだ教育学の理論は，恐らく教職大学院へ行かなければ一生知ることがなかったものであり，今，現場での職務遂行に大いに役立っている。以上のように私にとって教職大学院での経験は大変貴重なものであった。ゆえに，一人でも多くの教員に教職大学院へ進学していただきたい。今後も，この制度を続けていただき，佐賀県の各学校でリーダーシップの分散が図られ，協働的な職場が増えていくことを願う。

２年間，大学院で学ぶ貴重な研修の時間を与えてくださったことに感謝しております。熱心なご指導をいただいた先生方，現職院生やストレートマスターと出会えたことは私の大きな財産となりました。大学院で学んだことを活かし，学校現場に貢献することができるよう，今後さらに精進・研鑽を重ねていきたいと思います。

4.　調査結果の考察

(1)　本調査から得られた知見

ここまで，修了生に対する管理職の評価や，修了生自身の評価の特徴をみてきた。これに加えて，表 2-1 に示した管理職から見た修了生の評価と，表 3-3 で示した修了生自身が考える成果について，それぞれの肯定の割合を比較したものが，**表 4-1** である。これをみると両者で評価の傾向は類似しているが，全体的に修了生自身の評価に比べて，管理職の評価の数値が低いことがわかる。

表 4-1 管理職の評価と修了生の自己評価の比較（管理職・修了生ともに N=20）

番号	項目	肯定の割合（管理職）	肯定の割合（修了生）
1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	50.0%	80.0%
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	50.0%	80.0%
3	学校を「組織」として見られるようになった	55.0%	90.0%
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	70.0%	75.0%
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	65.0%	80.0%
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	55.0%	45.0%
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	65.0%	80.0%
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	25.0%	65.0%
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	75.0%	85.0%
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高まった	50.0%	65.0%
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	45.0%	75.0%
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	40.0%	40.0%
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	55.0%	65.0%
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	45.0%	60.0%
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	60.0%	65.0%
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	65.0%	60.0%
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	50.0%	50.0%
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	45.0%	60.0%
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	75.0%	95.0%
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	65.0%	85.0%
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	70.0%	80.0%
22	積極的に授業開発に臨むようになった	60.0%	100.0%
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	45.0%	80.0%
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	80.0%	95.0%
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	25.0%	25.0%
26	地域との関係づくりに積極的になった	15.0%	25.0%
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	30.0%	50.0%
28	学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった	―	25.0%
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった	―	75.0%
30	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	70.0%	90.0%

（注）28，29 の項目は，管理職には調査を行っていない。

各項目についてみると，「24 実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった」という項目が，双方ともに高い評価となっている。この他に，「4 物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった」，「5 学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった」，「7 学校が抱える教育課題の改善に向けて，改善意識をもって主体的に取り組めるようになった」，「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」，「15 学級集団づくりに積極的に取り組むようになった」，「16 校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった」，「19 児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった」，「20 教材研究や事例研究を積極的に行うようになった」，「21 教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった」，「22 積極的に授業開発に臨むようになった」も，双方ともに比較的高い評価となっている。さらに，「30 全体的に見て，教職大学院で学んだ成果をよく活かせている」への評価も双方ともに高い。

一方，「1 学校全体の視野で，物事を見られるようになった」，「2 社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった」，「3 学校を『組織』として見られるようになった」といった項目や，

「8 学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった」，「11 ベテラン教員に配慮できるようになった」，「23 学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった」等は，修了生自身の評価は高いものの，管理職の評価との間にかなりの隔たりがある。この要因として，管理職と修了生の評価の視点が異なることが考えられる。例えば，「8 学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった」については，管理職は実際に修了生が教育課程を編成しているかどうかという目線で評価をしていると考えられるが，修了生は自分が教育課程の編成について意識しているかどうかという基準で評価をしている可能性がある。

(2) 本調査における課題

本調査の課題としてまず挙げなければならないのは，調査対象と質問項目の整合性である。特に，管理職調査の自由記述でも指摘のあったところであるが，現職とストマスに対して，同じ調査票を用いることの難しさが挙げられる。例えば，管理職調査については，教職大学院で学んだ成果の評価（図 2-1，表 2-1），修了生に期待できる役割（図 2-2，表 2-2），教職大学院に望むこと（図 2-3，表 2-3）というそれぞれの項目で，ストマスの管理職では回答が難しい項目があったものと推察される。ストマス用，現職用に調査票を分けたり，共通項目と独自項目を細かく設定する等の調査票上の工夫が必要である。

次に，調査方法上の課題である。予備調査的位置づけである今回の追跡調査は質問紙への回答を通して実施したが，「1. 本調査の背景・目的・方法」の「(3) データ収集と分析の方法」でも述べた通り，今後行う予定である本調査では，データの妥当性や信頼性を高めるためのトライアンギュレーションの観点から，インタビュー調査や観察調査等も併用したミックスメソッドを通して収集したデータを基に，全体として及び各コースでより深い考察を行えるようにする必要があるだろう。学校種や校務分掌，職制等，修了生一人一人が置かれた状況が異なることから，それぞれの修了生の学習の成果を適正に測定し，学校における課題の改善につながるような視点も重視する必要がある。また各管理職は，当該校の修了生を見て教職大学院に対するイメージを形成して回答を行っていると思われるが，修了生の個性や職制に応じてそのイメージは多様なものになっていると推測される。今後の調査では，修了生の成長や教職大学院の教育課程の改善に資するような，多様な評価方法を検討していくことが必要である。このような課題はあるものの，今回の質問紙調査の結果に基づき，インタビュー調査等を含めた体系的なデザインを行うことは可能であり，その意味で予備調査としての目的は十分に達成されていると言えよう。

さらに，調査全体において，教職大学院としての統一性と各コースの独自性のバランスをどう取るのかという視点も重要である。各コースではどういった点で学生の「教員としての力量形成」を図るかのフォーカスが異なる。その独自性は重視していく必要があるが，他方で本大学院の教職大学院としての統一した教員養成ビジョンは不可欠である。つまり，本大学院での教員養成の全体的枠組みを，特に共通科目とコース科目の相互関係に着目しながら再検討し，それを今後の追跡調査の方法や対象，質問項目の構成に反映していくことが必要であろうし，そうすることによって本大学院の教育実践とその効果検証とが往還していくことになると言えよう。

最後に，今回のデータ収集方法に内在するデータの信憑性・妥当性についてである。今回の追跡調査は，E-Mail の添付ファイルを用いてデータ収集を行ったため，回答者の回答傾向を調査者が知ることができる条件下でなされた。調査協力に際しては，集計担当教員（荻野）以外の教員が原票を目にすることはない旨を明記していたし，実際にそれは徹底した。しかし，それでも回答者が配慮してい

る可能性はある。つまり，回答者の匿名性が担保されていないと考え，回答者が気を遣い，本音で回答していない可能性もある。もしそうだとしたら，それは調査に携わる者がより留意しなければならない事項であり，この点は今回の追跡調査のデータ収集方法に内在する限界として認識しなければならないだろう。

また，今回は予備調査的な意味合いが強かったこと，時間的制約が大きかったこともありメール利用によるデータ収集となったが，次年度以降実施予定の本調査においては，回答者の匿名性の確保とデータの信憑性・妥当性を向上させるという観点から，E-Mail 添付ファイル以外の質問紙調査票の回収方法も検討しなければならないだろう。以上の点については，今後，本調査を行う際の課題にしたい。

（2021 年 1 月 29 日　受理）

資料 1 管理職調査の依頼書

2020 年 10 月 28 日

所属長　各位

佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）令和元年度修了生
追跡アンケート調査ご協力のお願い

佐賀大学大学院学校教育学研究科
教育実践探究専攻長　　平田　淳

前略

平素より本教職大学院の運営にご協力頂きまして、誠にありがとうございます。令和２年３月に教職大学院第３期生が修了しまして、早半年が過ぎました。２年間大学院で研究したことを現場でどのように活かせているのか、指導に当たった者として期待と不安が入り混じった複雑な心境ではありますが、きっと貴校にとって何らかのお役には立てているのではないか、引いては佐賀県の教育をより良いものとすることに多少の貢献はできているのではないかと、希望的観測ながら思っております。

さてこの度、実際に修了生が教職大学院で学んだことをどのように、またどの程度活かせているのかについて、修了生本人及び修了生が所属する所属長様を対象に追跡アンケート調査を実施することとなりました。先生方には是非ご協力いただき、ご意見をお聞かせください。今後の教職大学院の運営に大いに活用させていただきたく存じます。なお、修了生には別途直接アンケート調査を行うようにしています。

調査につきましては、次のような形式で行うこととしております。

- ○ 質問項目はエクセルファイルにて作成し、選択肢方式と自由記述方式の双方を用いています。ご回答は、そのままエクセルファイルに書き込む形でご作成ください。
- ○ 調査自体へのご協力は完全に任意です。お気が進まない場合はご協力を辞退なさっても結構です。
- ○ 「調査自体への協力は構わないが、特定の設問には回答したくない」という場合、該当する設問は飛ばして回答を続けて頂いて構いません。
- ○ お答えになったアンケート用紙（原データ）は、下記担当教員以外が拝見することはありません。データは厳重に管理しますので、プライバシーの保護は厳格に行います。その他の教員は、担当教員が作成した集計結果のまとめを基に検討を行います。
- ○ アンケート結果を基に、追跡調査報告書を作成する（研究科紀要に掲載予定）計画ではありますが、使用するのは全体的な傾向を表す数値データ及び匿名性を確保した形で提示する自由記述回答のみです。報告書の記述から個人・学校が特定されることはありません。
- ○ ご回答やデータは、研究・教育目的にのみ使用いたします。その他の目的に利用することはありません。また、データは報告書作成時から一定期間（約 5 年間）保管した後に廃棄いたします。
- ○ **アンケート用紙は、令和２年 11 月 20 日（金）までに、下記メールアドレスまで添付ファイルにてご返信ください。**

以上、本教職大学院をより良いものとし、佐賀県の教育の発展に微力ながら尽力するための基礎となるデータ収集ですので、お忙しい中大変恐縮ですが、ご協力賜りたく存じます。

草々

資料 2 管理職調査の調査票

1．教職大学院で学んだ成果は，どの点にどの程度認められますか？

＊「5 とてもそう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

＊当てはまらない場合には，「99 該当しない」を選択してください。

＊初任者の場合は，以前と比べてではなく，これまでの初任者（若手教員）と比べてお答えください。

1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	
3	学校を「組織」として見られるようになった	
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高まった	
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	
22	積極的に授業開発に臨むようになった	
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	
26	地域との関係づくりに積極的になった	
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	
28	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	

2．今後，修了生に期待できる役割は何ですか？

＊「5 とてもそう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

＊当てはまらない場合には，「99 該当しない」を選択してください。

1	学校改善に向けてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
2	学年団，校務分掌等学校の組織化（マネジメントの強化）においてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
3	教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
4	生徒指導においてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
5	授業改善に向けてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
6	学習評価においてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
7	管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること	
8	主幹教諭・指導教諭になること	
9	校長・副校長・教頭になること	
10	教育行政機関に携わること	
11	学校と地域との関係づくりにリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
12	学校と保護者との関係づくりにリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	
13	学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること（あるいは積極的に関わること）	

3．今後，佐賀大学の教職大学院に望むことは何ですか？

「5 とても重要である」「4 まあ重要である」「3 どちらとも言えない」「2 あまり重要でない」「1 全く重要でない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション	
2	実習中の現職学生へのより積極的なサポート	
3	大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加	
4	校長に対する学校運営上の助言	
5	教育委員会に対する政策提言	
6	研修会等における講師や研究会での発表や指導助言	
7	学校との共同研究	

4．その他，教職大学院に対する意見がありましたら，自由にご記入ください。

資料 3 修了生調査の依頼書

2020 年 10 月 28 日

佐賀大学大学院学校教育学研究科
（教職大学院）
第３期修了生　各位

修了生追跡アンケート調査ご協力のお願い

佐賀大学大学院学校教育学研究科
教育実践探究専攻長　　平田　淳

前略

みなさんが佐賀大学教職大学院を修了されてから、早半年が過ぎました。現職院生だったみなさんは、きっとミドルリーダーとして学校等の中核を担い、ストマスだったみなさんは各校のヤングリーダーとして、それぞれご活躍のことと思います。

さてこの度、実際にみなさんが教職大学院で学んだことをどのように、またどの程度活かせているのかについて、追跡アンケート調査を実施することとなりました。みなさんには是非ご協力いただき、ご意見をお聞かせください。今後の教職大学院の運営に大いに活用させてほしいと思います。

調査につきましては、次のような形式で行うこととしております。

- ○ 質問項目はエクセルファイルにて作成し、選択肢方式と自由記述方式の双方を用いています。回答は、そのままエクセルファイルに書き込む形で作成してください。
- ○ 調査協力は完全に任意です。気が進まない場合は協力を辞退しても構いません。
- ○ 「調査自体への協力は構わないが、特定の設問には回答したくない」あるいは「自分には当てはまらない」という場合、該当する設問は飛ばして回答を続けてもらって構いません。
- ○ お答えになったアンケート用紙（原データ）は、下記担当教員以外が拝見することはありません。データは厳重に管理しますので、プライバシーの保護は厳格に行います。その他の教員は、担当教員が作成した集計結果のまとめを基に検討を行います。
- ○ アンケート結果を基に、追跡調査報告書を作成する（研究科紀要に掲載予定）計画ではありますが、使用するのは全体的な傾向を表す数値データ及び匿名性を確保した形で提示する自由記述回答のみです。報告書の記述から個人・学校が特定されることはありません。
- ○ ご回答やデータは、研究・教育目的にのみ使用いたします。その他の目的に利用することはありません。また、データは報告書作成時から一定期間（約 5 年間）保管した後に廃棄いたします。
- ○ **アンケート用紙は、令和２年 11 月 20 日（金）までに、下記メールアドレスまで添付ファイルにてご返信ください。**

以上、本教職大学院をより良いものとし、佐賀県の教育の発展に微力ながら尽力するための基礎となるデータ収集ですので、お忙しい中大変恐縮ですが、ご協力をお願いします。

草々

資料 4 修了生調査の調査票（授業実践探究コース）

1．【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を，現在，以下のそれぞれの分野において，どの程度活かせていますか？

共通必修科目とは，①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。

「5 十分に活かせている」「4 まあ活かせている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かせていない」「1 全く活かせていない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成	
2	授業における実践的指導力の向上	
3	教材開発能力の向上	
4	教科等におけるICT利活用能力の向上	
5	現代的な学力観や学力育成への対応	
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談	
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応	
8	学級経営の実践的指導力の向上	
9	学校経営に関する諸問題への対応	
10	学校と地域との連携の推進	
11	学校と保護者との連携の推進	
12	自己のキャリアデザイン	

2．【授業実践探究コース専門科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか

専門科目とは，①「学力と学習評価の研究」②「授業実践の研究」③「授業実践指導法の開発」④「授業実践内容の開発」⑤「授業実践と学習評価の開発」⑥「授業実践と学習評価の省察」を指します。

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	学力と学習評価について考察する力	
2	授業を実践し目的に応じて分析する力	
3	各教科の授業における指導力	
4	各教科の内容について研究する力	
5	それぞれの専門教科の教材と学習評価を**開発**する力	
6	それぞれの専門教科の教材と学習評価を**省察**する力	

3-(a)．（現職院生）【実習科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1) 「異校種実習」（1年次）について		
1	異校種の教育活動に対する理解	
2	異校種における授業実践に対する理解	
3	異校種における児童・生徒に対する理解	
4	異校種における教師文化に対する理解	
(2) 「学校変革試行実習」（2年次）について		
5	学校の課題について把握する能力	
6	理論を活用して学校変革の計画を立てる能力	
7	計画に即して授業研究を行う能力	
8	授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力	

3-(b)．（ストマス）【実習科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1) 「基盤実習」（1年次）について		
1	教科等指導力	
2	児童生徒とのコミュニケーション力	
3	特別な配慮を要する児童生徒へのケア	
4	学級経営力	
(2) 「学校課題探究実習」（2年次）について		
5	教科等指導力	
6	児童生徒とのコミュニケーション力	
7	計画に即して授業研究を行う能力	
8	授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力	

4－(a)．（現職院生）【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について**	
1	現任校の課題を発見・分析する能力	
2	授業に関わる理論研究と，現任校の課題を結びつける能力	
3	自らの授業に関わる課題に対する改善策を立案する能力	
4	達成目標を設定し，客観的な資料やデータを収集する能力	
(2)	**「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について**	
5	授業に関わる研究課題に応じた授業改善を行う能力	
6	自己の授業改善の実践について，理論と実践の往還によって考察を深める能力	
7	自己の授業実践を評価することができる能力	

4－(b)．（ストマス）【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について**	
1	自らの課題を発見・分析する能力	
2	理論研究と，自らの課題を結びつける能力	
3	課題に対する改善策を立案する能力	
4	達成目標を設定し，客観的な資料やデータを収集する能力	
(2)	**「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について**	
5	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	
6	自らの課題に対する改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7	自己の教育実践を振り返ることができる能力	

5．教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について，それぞれの満足度を教えてください。

「5 とても満足している」「4 まあ満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	各演習室などの学習環境	
2	院生共同研究室などの生活環境	
3	大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4	教員チームによる学生指導	
5	現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6．教職大学院で2年間学んだ成果を，以下のそれぞれの点に，どの程度感じますか？

「5 とてもそう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	
3	学校を「組織」として見られるようになった	
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	
10	若手（自分より年下や同年代の）教員に対する指導力・助言力が高まった	
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	
22	積極的に授業開発に臨むようになった	
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	
26	地域との関係づくりに積極的になった	
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	
28	学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった	
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった	
30	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	

7．その他，教職大学院に対する意見がありましたら，自由にご記入ください。

資料 5 修了生調査の調査票（子ども支援探究コース）

1．【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を，現在，以下のそれぞれの分野において，どの程度活かせていますか？

共通必修科目とは，①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。

「5 十分に活かせている」「4 まあ活かせている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かせていない」「1 全く活かせていない」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成	
2	授業における実践的指導力の向上	
3	教材開発能力の向上	
4	教科等におけるICT利活用能力の向上	
5	現代的な学力観や学力育成への対応	
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談	
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応	
8	学級経営の実践的指導力の向上	
9	学校経営に関する諸問題への対応	
10	学校と地域との連携の推進	
11	学校と保護者との連携の推進	
12	自己のキャリアデザイン	

2．【子ども支援探究コース専門科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

専門科目とは，①「児童福祉と教育」②「教育相談における見立てと手立て」③「子ども支援活動実践の開発・省察」④「発達障害を持つ子どもの理解と支援」⑤「心身の発達過程論」⑥「個が生きる集団づくりのための生徒指導」を指します。

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	不登校やいじめなどに対して，複数の具体的なアプローチを考える力	
2	児童生徒の学習意欲や態度について，心理学的な観点からの理解	
3	発達障害のある児童生徒に対して，ニーズに応じて教室でできる複数の具体的なアプローチを考える力	
4	自殺予防教育やストレスマネジメント教育などの心理教育を具体的に実践する力	
5	地域における特別支援教育の相談機関や制度などについての理解	
6	児童福祉のあり方，及び児童福祉と教育の関連性や連携のあり方に関する理解	
7	生徒指導の機能を活用し，子どもに自己指導能力と社会的リテラシーを育成する力	
8	子どもを対象とした知能，パーソナリティ，メンタルヘルスおよび学級集団に関するアセスメント手法を理解し，学校現場で活用できる力	

3-(a)．（現職院生）【実習科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「関係機関実習」（1年次）について**	
1	関係機関（児童相談所，適応指導教室）の役割や職務に対する理解	
2	関係機関（児童相談所，適応指導教室）の職務と学校の課題の関係性に対する理解	
3	学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解	
4	学校外での人的ネットワークの形成	
(2)	**「学校変革試行実習」（2年次）について**	
5	現任校の課題に即した組織づくりの能力	
6	計画を立てて改革を進める能力	
7	現任校の課題に即した問題解決能力	
8	実践の中で，問題の構造への理解を深めていく能力	
9	リサーチプランを立てて，研究を実施する能力	
10	スクールリーダーとしての教育実践力・指導力	

3-(b)．（ストマス）【実習科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「基盤実習」（1年次）について**	
1	教科等指導力	
2	児童生徒とのコミュニケーション力	
3	特別な配慮を要する児童生徒へのケア	
4	学級経営力	
(2)	**「学校課題探究実習」（2年次）について**	
5	教科等指導力	
6	児童生徒とのコミュニケーション力	
7	特別な配慮を要する児童生徒へのケア	
8	学級経営力	

4-(a).　（現職院生）【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について**	
1	現任校の課題を発見・分析する能力	
2	理論研究と，現任校の課題を結びつける能力	
3	課題に対する改善策を立案する能力	
4	学校改善の過程を構造して捉える能力	
(2)	**「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について**	
5	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	
6	自己の学校改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7	自己の教育実践を振り返ることができる能力	

4-(b).　（ストマス）【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について**	
1	自らの課題を発見・分析する能力	
2	理論研究と，自らの課題を結びつける能力	
3	課題に対する改善策を立案する能力	
4	達成目標を設定し，客観的な資料やデータを収集する能力	
(2)	**「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について**	
5	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	
6	自らの課題に対する改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7	自己の教育実践を振り返ることができる能力	

5．教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について，それぞれの満足度を教えてください。

「5 とても満足している」「4 まあ満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	各演習室などの学習環境	
2	院生共同研究室などの生活環境	
3	大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4	教員チームによる学生指導	
5	現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6-(a).　（現職院生）教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に，どの程度感じますか？

「5 とてもそう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	
3	学校を「組織」として見られるようになった	
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高まった	
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった（自分の役割を積極的に果たすようになった）	
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	
22	積極的に授業開発に臨むようになった	
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	
26	地域との関係づくりに積極的になった	
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	
28	学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった	
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった	
30	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	

6－(b)．（ストマス）教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に，どの程度感じますか？

「5 とてもそう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	
2	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	
3	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	
4	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	
5	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	
6	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	
7	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	
8	積極的に授業開発に臨むようになった	
9	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	
10	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	
11	学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった	
12	研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった	
13	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	

7．その他，教職大学院に対する意見がありましたら，自由にご記入ください。

資料6 修了生調査の調査票（教育経営探究コース）

1．【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を，現在，以下のそれぞれの分野において，どの程度活かせていますか？

共通必修科目とは，①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。

「5 十分に活かせている」「4 まあ活かせている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かせていない」「1 全く活かせていない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成	
2	授業における実践的指導力の向上	
3	教材開発能力の向上	
4	教科等におけるICT利活用能力の向上	
5	現代的な学力観や学力育成への対応	
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談	
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応	
8	学級経営の実践的指導力の向上	
9	学校経営に関する諸問題への対応	
10	学校と地域との連携の推進	
11	学校と保護者との連携の推進	
12	自己のキャリアデザイン	

2．【教育経営探究コース専門科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

専門科目とは，①「学校組織論」②「学級・学校危機管理論」③「学校経営課題探究の方法論」④「地域教育経営課題探究の方法論」⑤「学校内外連携・協働論」⑥「教育経営改善の開発・省察」を指します。

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	学校を「組織」として捉える視点	
2	現任校の諸課題を構造的に理解する能力	
3	現任校における自分の位置付けを相対化できる能力	
4	現任校の課題を解決するための組織づくりの方法	
5	学校組織におけるリーダーシップの重要性	
6	ミドルリーダーとして学校改善のために行動する能力	
7	教職員の「協働」の重要性への理解	
8	学校教育目標に関する短期的・長期的な視点	
9	教員評価や学校評価など，自らの活動への評価に関する理解	
10	地域や保護者との連携を推進する力	
11	学校における危機管理能力	

3．【実習科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1)	**「関係機関実習」（1年次）について**	
1	教育委員会の役割や職務に対する理解	
2	教育委員会の職務と学校の課題の関係性に対する理解	
3	学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解	
4	学校外での人的ネットワークの形成	
(2)	**「学校変革試行実習」（2年次）について**	
5	現任校の課題に即した組織づくりの能力	
6	計画を立てて改革を進める能力	
7	現任校の課題に即した問題解決能力	
8	実践の中で，問題の構造への理解を深めていく能力	
9	リサーチプランを立てて，研究を実施する能力	
10	スクールリーダーとしての教育実践力・指導力	

4．【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により，以下に挙げることはどの程度身につきましたか？

「5 とても身についた」「4 まあ身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

(1) 「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について		
1	現任校の課題を発見・分析する能力	
2	理論研究と，現任校の課題を結びつける能力	
3	課題に対する改善策を立案する能力	
4	学校改善の過程を構造して捉える能力	
(2) 「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について		
5	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	
6	自己の学校改善の実践を，理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7	自己の教育実践を振り返ることができる能力	

5．教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について，それぞれの満足度を教えてください。

「5 とても満足している」「4 まあ満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	各演習室などの学習環境	
2	院生共同研究室などの生活環境	
3	大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4	教員チームによる学生指導	
5	現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6．教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に，どの程度感じますか？

「5 とてもそう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか**1つ**を選択して，オレンジ色のセルにご回答をお願いします。

1	学校全体の視野で，物事を見られるようになった	
2	社会との関係性の中で，学校のことを考えられるようになった	
3	学校を「組織」として見られるようになった	
4	物事を円滑に進めるため，見通しを持って計画的に進めるようになった	
5	学校教育目標の実現に向けて，短期的・長期的視野で考えて取り組むようになった	
6	様々な企画・立案を行い，学校運営に積極的に貢献できるようになった	
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて，課題意識をもって主体的に取り組めるようになった	
8	学校や地域，児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった	
9	同僚教員との協働関係に気を配れるようになった	
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高まった	
11	ベテラン教員に配慮できるようになった	
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすようになった	
13	校務分掌で，リーダーシップを発揮できるようになった	
14	学年集団で，リーダーシップを発揮できるようになった	
15	学級集団づくりに積極的に取り組むようになった	
16	校内研究や研修等において，リーダーシップを発揮できるようになった	
17	様々な場面で，スクールリーダーとしての自覚が高まった	
18	生徒指導や教育相談等において，高い専門的知識と実践力を発揮できるようになった	
19	児童・生徒に積極的に関わり，深い理解に努めるようになった	
20	教材研究や事例研究を積極的に行うようになった	
21	教科・学習指導において，貢献できる部分が大きくなった	
22	積極的に授業開発に臨むようになった	
23	学習成果を的確に把握するため，学習評価にも工夫を加えるようになった	
24	実践を振り返り，指導力向上に努めるようになった	
25	研修会での講師を任されるなど，学校外でも貢献できるようになった	
26	地域との関係づくりに積極的になった	
27	様々な保護者に対応する能力が高まった	
28	学会発表や論文の公表など，学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった	
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし，積極的に学ぶようになった	
30	全体的に見て，教職大学院で学んだことをよく活かせている	

7．その他，教職大学院に対する意見がありましたら，自由にご記入ください。